パスカルに於ける Duplicité について

仁戸田六三郎

一、前提

本稿は主として「パンセー」(Pensées sur la religion et sur quelques autres sujets) 以前のパスカルに現われた duplicité 即ち二重性について出来るだけ簡単に論述するものである。パスカルの作品はそれが現存する形態自体を以てすれば必ずしも体系的ではない。即ち第三者に体系的な理解を与えるようにはなつていない。比較的かかる点に関して明瞭に感ぜられるものは「サシとの対話」即ち正確には Entretien de Pascal avec M.de Sacy sur Épictète et sur Montaigne Extrait des "Mémoires pour ser vir à l'histoire de Port-Royal" de Fontaine であろうが、之れはパスカル自身の作ではなく、此の対話がポールロワイヤルで行われてから約四十年を経て世に出たものである。これは後にも触れるけれども、フオンテーヌが果してパスカルの言葉を真実に伝えて居るか否かに就いて、論議の対象になつている。ストロウスキーの如きは此の覚書の価値を高く認めていない。特にパンセーに至つてはポール・ロワイヤル版のペリエの序文にも語られているように実に複雑であつて、ブルンシュウイックの編集に依る「パンセー」の如く従来の配列と異つた配列をしているものがある位である。「パンセー」の自筆原稿と二つの Copie (九二〇三並びに一二四四九—この番号は Bibliothèque Nationale

の番号を意味する）の間に存する夫々の異同を考察してみるならば恐らくは決定的な断定は殆んど不可能であろう。パスカルのフラグマンの分類は恐らく永久に未解決であるかの如き感を与えるのである。最近のパスカルの文献考証学者の一人であるルイ・ラフユウマはその著 Recherches Pascaliennes の中で Mais le problème du classement des Pensées n'est toujours pas résolu……(P.22.) と言つている位である。その原因の最も重要な点はポール・ロワイヤルの序文が物語つている。特に「パンセー」はパスカルが「思い起すのに必要なものだけ」(d'y mettre seulement les choses qui estoient necessaires pour le faire ressouvenir……) のものを草稿として記したに過ぎない。此の意味に於て Recueil Original (九二〇二) は謂わば作品そのものではなく、作品の材料に過ぎないものであろう。シャルル・ノヂエも Les Pensés de Pascal n'étaient pas un livre: c'était matière de livre……(Bulletin du bibliophile 1843, P.106) と言つている位である。これはE・ペリエが例の序文 liasses composées de petits papiers écrits d'un côté et de feuilles volantes と言つている事からも考えられるであろう。更にまたブランシユウィックも、c'est une collection de feuilles séparées ou de petits morceaux de papier, collés comme sur un album à une date qui n'est pas antérieure à 1711……(Éd des Grands écrivains. T.I.P.■) と言つている。

ガリックはラフユウマの「パンセー」の序文の中で Pascal meurt: l'histoire des Pensées commence…(Pascal Pensées Hachette. 1950 P.15 Introduction par Robert Garric) と興味深い言葉を洩らしている。或る観点から見れば、パスカルの死に依つて「パンセー」の歴史は開始され今日に迄至つているとも言えるであろう。

にも拘らずパスカル自身の意図は当初からかくの如き「覚書」乃至「備忘録」的なものではなく、E・ペリエの序文（ポール・ロワイヤル版）が物語る如く、パスカルがポール・ロワイヤルの人々に講演した内容は理路整然としていたのである。吾々が現在読む「パンセー」に於ても体系的なサンスが非常に自覚されパスカルの自意識の中に存在していた事を知るので

ある。即ち作品を書く時最後に気付く事は何を最初に置くべきかと言う事だと言つているのである。(La dermière chose qu'on trouve en faisant un ouvrage, est de savoir celle qu'il faut mettre la première (Pensées. Éd. Port-Royal XXXI Brunschvicg. 19) また言葉は異なる排列をすれば異なる意味を生じ、意味は異なる排列をすれば異なる効果を生じると言つている。(Les mots diversement rangés font un divers sens, et les sens diversement rangés font différents effets (Pensées. MS.225. Brunschvicg 23.) 此の意味に於て現存するパスカルの「パンセー」の草稿の表現と形式並びに在り方一般を端的に非体系的であり、パスカル自身もかかる人間であると考えるのは誤りであると思う。パスカルの作品の文献学的考証は幾多の難問題を含むものであるが、それは何れ別の機会に譲つて此処では、これから試みる論述に対して最少限定の考証的前提を示したに過ぎぬのである。私見に依れば文献考証に立脚しない研究は学問的ではあり得ないと思うのである。

二、前提よりの出発

右に述べた事は例えばパスカルの宗教思想に関する諸問題の一つとして duplicité を取扱うに際し、私自身の勝手な論理的思惟に基く事を出来る限り避けんとする意図に依るものであつて、パスカルの所説を如何に配列して私が論ずる場合も私が前提として意識して居なければならぬ最少限度の制約なのである。

そこで先ず私が取り挙げたいのは、パスカルの宗教思想を通じて一つの特色となつている二重性の思惟方法である。この二重性の論理は同一の場に於て内在する相反するものに就いての思惟である。それはかかる論理自体がかく考えるのであると言う解釈学的見解も成立するかも知れない。しかしながら宗教思想に於ける論理はかかる見解に依つて完全に規定し尽し得るものではないように考えられる。パスカルの思惟の出発は二重性にあると考えられる。即ち彼は「パンセー」に於て、

此の事を明瞭に述べている。

Les deux raisons contraires. Il faut commencer par là (Pensées: MS.142. Brunschvicg 567)

此の如く相反する論拠、そこから出発しなければならないと言う事は、パスカルの思想を貫流する基本的な思惟方法である。

かかる方法は彼自身の個性的な思惟であつて、伝統的な正統な考え方ではない。此の点のみを以てすれば、デカルトやスピノザと軌を一つにするようにも思われる。しかし乍らデカルトは Semper existimavi duas quaestiones, de Deo et de Animâ, praecipuas esse ex iis quae Philosophiae potius quam Theologiae ope sunt demonstrandae (Descartes. Meditationes de prima philosophia A.T.Ⅶ.1) と言つている如く、それは所謂無神論的な神の探求であり、神学の否定になつた。同様にスピノザに於ては ad separandam philosophiam a Theologia (Spinoza. Tractatus Theologico-politicus. Cap.Ⅱ Spinoza Opera〔Gebhardt〕T Ⅲ p.44.) と主張されている通り、哲学の立場に立つ事は神学よりの分離を意味した。神を問題にしながら、その方法が純粋に哲学的たらんとしたから、成立宗教の所有する神学から離れ之れを否定する結果になつた。

この問題に関しては別の機会に詳細に論じてみたいと思つている。十七世紀に於ける哲学と言う用語は自然的理性(raison naturelle)に依る学であるから、現代吾々の言う哲学と概念規定を異にするものである事を附言して置く。

一六四七年版の省察録の仏訳には下の如きデカルトの言葉がある。 C'est pourquoy j'ay crû qu'il ne serait pas contre le devoir d'un philosophe si je faisois voir icy comment, et par quelle voye nous pouvons, sans sortir de nous-meme connoistre Dieu plus facilement et plus certainement, que nous reconnoissons les choses du monde—— 以上の文で私がアンダー・ラインを引いた個所は興味あるように私には思われる。吾々自身から離れないと言う事は、他面神学から離れる事を意味している。この文はA・T版にはないが、吾々自身から離れる事は je pense, donc je suis と言う第一原理を意味することは当然である。従つて伝統的権威の思惟でない事は明白である。

然るにパスカルに於ては独自の思惟方法を用いながらも、神学と同一の帰結に到達しているのである。これはフオンテーヌの覚書である「サシとの対話」の終りに明記されている。それはパスカルが一六五四年十一月二十三日夜 Conversion définitive を経て翌年深い信仰生活に身を投じていたポール・ロワイヤル (Port-Royal des Champs) でサシ (Le Maitre de Sacy) と行わたものである。

Ce fut ainsi que ces deux personnes d'un si bel esprit s'accordèrent enfin au sujet de la lecture de ces philosophes et se rencontrèrent au même terme, où ils ar rivèrent néanmoins d'une manière différente: M.de Sacy y étant venu tout d'un coup par la claire vue du Christianisme, et M.Pascal n'y étant arrivé qu'après beaucoup de tours, en s'attachant aux principes de ces philosophes. (Enturetien de Pascal avec Sacy sur Epictète et Montaigne.)

此の記述が当時の真実を伝えているか否かは今日尚問題とされてるところである。ストロウスキーは対話の内容が余りに整然とし過ぎて、エピクテトスの引用文は一六〇九年のサシ、フランソワの訳文を逐字的に取つたものであり、四十年も経てお人好のフオンテーヌが、かくも正確に想起し得たかが疑わしいし、怪しげな記憶や友人達の記録を合せて作つたものとしてその真実性を否定している。(Les Pensées de Pascal, Étude et Analyse par Fortunat Strowski. P. 74-75) しかし一般的には大体に於て貴重な資料としてその価値が認められているようであるから、私は仮りにそれに従つて置く。

右の文中 denx personnes はパスカルとサシであり、ces philosophes とはエピクテトスとモンテーニュである。そして終結に対してはパスカルもサシも一致していたに拘らず、その過程が興味ある対照を示している。即ちサシは端的に基督教知見に依るものであるが、パスカルは両者の哲学原理に密着しつつ多くの廻り路を経た後 (après beaucoup de tours) に終結に達したのである。

此処で私が問題にしたいのは après beaucoup de tours と言う事である。これはサシとの対照に於て言うならば、端的

な基督教的な知見や理論換言すれば正統的乃至伝統的なカトリシズムの理論や知見に依らずして、パスカル自身の思惟に依る事を意味している。重ねて言うならば、独自の思惟に拠りながらも、デカルト的にもスピノザ的にもならなかつた点に問題があるように思われる。乃ち私は此処にパスカルの宗教思想の特色即ち二重性の問題があるのではないかと思うのである。

伝統的な基督教の真理を自然的理性に依つて立証出来ると言う主張は既にパスカル以前からあつた。例せばレーモン、スボン（Raimond Soubond）はその一人で、モンテーニュは彼の理論に興味を抱き、その父の依頼もあつて、スペイン語のその作品を仏訳したと言われる。しかしそれは多くの誤解を生じ波乱を起したので、モンテーニュはスボンを弁護するために論文を書いた。これはモンテーニュのエッセイ中最長のもので Apologie de Raimond Soubond として有名である。パスカルは一六五二年から決定的回心前までの所謂世俗時代メレ（Chevalier de Méré）との交際からモンテーニュの作品に接して影響を受けたと言われる。しかし、モンテーニュの弁護は結果に於て弁護と言う本来の意味から脱落してしまつた感が深い。学者に依つてはパスカルの二重性がこのスボンとモンテーニュの線に深い因果関係を持つように言われるが、私は否定するものではが、一面的に過ぎると思うものである。

しかし、私がかくの如く論ずる場合、或る人はヘーゲルの宗教哲学を想起して、パスカルとの異同を私に対して問うかも知れない。と言うのは、ヘーゲルもその「宗教哲学」absolute Religion に於てプロテスタント的基督教を認めているからである。例せば三位一体論を取り挙げてヘーゲル独自の弁証法で論じている。私見に依れば Vater, Sohn, Heiliger Geist を説くヘーゲルの論述は如何にも得意満面と言う印象を受けるように思われる。

此の点はヘーゲルの周辺に於ける種々なる物議をかもした問題に比較して完全であつた様に思われる。フイヒテの法廷に於ける弁明は要するに自己の哲学に忠実であつた為め、伝統宗教から無神論者と誤解された結果である。その Gerichtliche Verantwortung gegen die Anklage des Atheismus の中で、フイヒテは卒直なる自己の心情を披瀝して Ich bedarf nur der Ruhe um mich herum und persönlicher Sicherheit と言つている。身辺の平安と身上の安全を求めると言う告白は彼自身の哲学説と如何なる関係があるか。晩年の作品 Anweisung zum seligen Leben に於ては伝統宗教と非常に接近して ich insbesondere den Evangelisten Johannes allein als Lehrer des echten Christentums gelten lasse……と言いつつ使徒ヨハネを賞讃し、その理由として dieser allein hat Achtung für die Vernunft und beruft sich auf den Beweis, den der Philosoph allein gelten lässt, と述べている。此の所説を考えてみると、キリスト教の一点と一致しながら哲学者としての立場に固執している有様がよく見られる。またシュライエルマッハーは Reden

über die Religion に於ける汎神論的傾向が問題となり Christlicher Glaube に於ては全く態度を改めている。ヘーゲルはかかる曲折を比較的経ずして、自己の哲学とを基督教とを一致せしめている点は一つの問題となるように考えられる。私の言わんと欲する処は、多くの論証を経て（今此処ではそれは出来ぬ）パスカルにはかかる問題は有り得ぬと言う事である。勿論 Compagnie de Jésus と Port-Royal との対立抗争は十九世紀ドイツに於けるプロテスタント神学の問題とは比較にならぬ程血なまぐさい問題をまき起した。人はアルノオ (Arnauld) を中心として起つた問題を取り挙げても解るであろう。ドイツの哲学者（上述の）は彼等に比較しておとなしい人間であつたようにも思われる。（此の点に就いて私は多くの論拠を持つている）

右の点をのみ観るならば相通ずる面があるであろうが、ヘーゲルが哲学体系自体を主体的に考えていて、それを前提として宗教を自己の哲学の対象とする立場はパスカルと性格的に異るものと言わなければならない。ヘーゲルの言葉を左に掲げならば、

Ich habe es für nötig erachtet, die Religion für sich zum Gegenstand der philosophischen Betrachtung zu machen und diese Betrachtung als einen besondern Theil zu dem Ganzen der Philosophie hinzufügen.

(Hegel: Religionsphilosophie Einleitung)

Wenn wir oben sagten, dass die philosophie die Religion zum Gegenstande ihrer Betrachtung mache……

(ibid. Ⅱ. 1.)

この言葉のような極めて小部分を捕えて全般的に規定することは正しい事ではないが、紙面の都合上仮りに寛恕されるならば、ヘーゲルに於ては哲学体系自体が主体性を持つていて、宗教はその対象である事が知られる。之れに反してパスカルに於ては宗教は対象ではない。勿論ヘーゲルの言う宗教とパスカルの言う宗教とは概念規定を同一にすべきではないであろう。パスカルに於ては哲学的理性と宗教的心情とは両者何れも主体的なものであつて、何れかが対象になるものでもなく、何れかが他に先行するものではない。然らばスピノザに於ける思惟と延長の如きものであるかと言えば、かかるものでも全くな

いのである。スピノザに於ては Cogitatio と extensio は並行するものであつて、神である Substantia から三角形の内角の和が二直角である必然性と等しい必然性で演繹されたものに他ならない。パスカルに於ては寧ろ真の哲学は哲学を軽蔑するものでなければならないのである。Se moquer de la philosophie, c'est vraiment philosopher (Pensées MS. 119. Brunschvicg. 4.) これは単なる逆説的快感として冷笑に附せられるかも知れないが、かかる表面的な批判的冷笑を越えて内面に存在するパスカルの意図を内在的に把握するならば、主体的な立場が見られるであろう。此の主体的な立場に於てパスカルの二重性が存在するものと考えられる。此の如きパスカルのサンスは現代に於ても一つの底流として認める事が出来る。例えばマルセルのActe et Personne がそれであり、ムニエの如きはパスカルをフランスの弁証法と実存主義の父としているのである。(Pascal, père de la dialectique et de la conscience existentielle moderne……Emmanuel Mounier: Le Personnalisme. 1950 P. 13.) 私はかかるパスカルに於けるものとして、二重性の考察をはじめたいと思うのである。

三、真空論序説の問題

決定的回心以前のパスカルの作品に「真空論序説」(Préface sur le traité du vide) がある。これはブランシュウィックやグートルーに依ると、一六四七年の十月から十一月の間に書かれたものらしい。此の論文に関するノートを後にパスカルは「パンセー」の中で試みている。

ラフュウマの編する「パンセー」第二巻一八頁には Note pour le 《Traité du Vide》(1651) として入れられている。ブランシュウィックはその「パンセー」七五に置いている。MS は三九三であるが、Copie にも Port-Royal 版には見当らない。

パスカルは此の作品の中で既に理性と心情 (raison et coeur) の二重性を語つている。パスカルは権威に依る真理と自然性に依る真理の Contriété 上に立つ。それ故彼は真理は只一つでなく多数である事を認めるのである。(Il y a un

grand nombre de vérités,……Pensées. Port-Royal XXVIII.) 権威に依る真理は常に理性に依る真理と二重性 Contrariété に立つのであつて、決して前者は後者を駆逐するものではない。

Je ne prétends pas bannir leur authorité pour relever le raisonnement tout seul (Oeuvres de Blaise Pascal. par Léon Brunschvicg et Pierre Boutroux. 1923. Ⅱ. 132. P.)

此処で力点が置かれているのは両者の区別であつて、決して何れかが他を支配すると言うのではない。権威とはパスカルに於てはカトリシズムであり、聖書の著者が自然と言うものを用いずに神の存在を証明した事を喜んでいる。(C'est une chose admirable que jamais auteur canonique ne s'est servi de la nature pour prouver Dieu, Pensées Copie 254. Brunschvicg 243.) そして権威のみが吾々を啓蒙し、その権威が主力となるものは神学であると考えた。(C'est authorité seule qui nous en peut esclaircir. Mais où cette authorité a la principale force, c'est dans la theologie…Préface sur le Traité du Vide) 此の一言に依つてもパスカルは神学を認めていた事が知られるであろう。かくの如く権威と神学は同一本質に基くものであつて、此の立場は一貫してパスカルを貫いているものである。自然的理性の世界を認めて居る事が前提となつて、この権威の世界を考える事が出来るのである。かかる権威に依る世界はG・ペリエが伝うるところに依ればパスカルの幼少の頃から内在したものであつて、信仰の問題は理性の対象にはなり得ないと考えていたらしい。(tout ce qui est l'objet de la foi ne le peut être de la raison. La Vie de M. Pascal écrite par Madame Périer sa soeur)

次に之れと同時にパスカルは自然的理性の世界を認めた。そこでは推理と感覚の作用が行われる。自然の認識は理性が行うのであつて (la raison seule a lieu d'en connoistre)、そこに科学の無限の進歩が考えられた。権威の世界では自然的理性は役に立たないように、権威は此の認識の世界に於ては無用の長物と考えられた。

Il n'een est de mesme des subjets qui tombent sous le sens ou sous le raisonnement: l'authorité y est inutile

(Ⅱ.P.132)

右のパスカルの考え方を考察してみると、権威の世界から感性と推理の世界を演繹しようとするものでもなく。また後者を否定するものでもない事を知るのである。真空論序説はかくの如く二つの世界を上述の如き意味に於て示している。自然的な理性の世界は権威の世界とは別個に存在し、権威と理性は人間と言う同一主体に於て反対対立として存在しているのである。認識の世界に於てパスカルは自然の無限を語り、それに比して人間の存在が如何に貧弱であるかを強調している。それはあたかも「パンセー」に現われる人間の悲惨(Misère de l'homme)の伏線であるかの如き印象を受けないでもない。

四、対話に示された二重性

右の思想は「サシとの対話」に於て一層明瞭に示されている。エピクテトスは人間の偉大さをのみ強調し過ぎたと語り、モンテーニュは人間の悲惨さのみ力説したと語つて、両者を同時に否定するのである。私はこの問題に関するパスカルの論証過程を此処で取り挙げて、パスカルの宗教思想の特色が二重性の論理にあることを示したい。

パスカルに依ればエピクテトスは人間の義務を重要視した事は賞讃に価するけれども、人間の無力を知らなかつた点に大いなる欠陥があるのである。人間の尊大を否定する論拠は人間の無力と悲惨の実存にあると言う事はパスカルの常に主張することであるが、しかしながら、その論拠は人間の悲惨を強調するモンテーニュとは似て非なるものである。モンテーニュは「レーモン・スボンの弁護」の中で赤裸々な人間を取り挙げている。即ち他の助力もなく自分自身の武器のみで武装され恩寵と聖なる知識を奪われた人間ただ独りを考えてみよう——と言うのである。(Considerons donq pour cette heure l'homme seul, sans secourd estranger, armé seulement de ses armes, et despourveu de la grace et cognoissance divine, qui est tout son honneur, sa borce, et lé fondement de son estre.——Montaigne Essais. Ⅱ. Chap.

XII.Apologie de Raimond Soubond. Édition Garnier Frères, P, 129)

このモンテーニュの立言に対しパスカルは「対話」に於て、モンテーニュは信仰の光がない場合、理性が如何なる道徳を課すべきかを探求せんと欲し、かかる前提の下に原理を取つたのであると解釈している。モンテーニュは上述の無力な赤裸々な人間を自然の無限に対決させて、人間の悲惨を更に一層明示しようとした。この対決の中で彼は人間の尊大な自惚を指摘して之れを極力非難している。即ち彼に依れば自惚は人間の本能的で始源的な病気なのである。(La presomption est nostre maladie naturelle et originelle La plus calamiteuse et fraile de toutes les creatures, c'est l'homme Montaigne: Essais Ⅱ. chapⅫ. Apologie de Raimond Soubond Édition Garnier Frères Ⅱ.P. 132) 人間存在のはかなさと醜さをかくの如くモンテーニュは指摘するのであるが、パスカルは同様に自然との対決に於て人間を規定しようとしている。このパスカルの方法は「パンセー」(MS. 347. Brunschvicg. 72) に於てモンテーニュの美文に託して語つて居るし、先の「真空論序説」に於ても、人間を無限者のためにのみ生み出されたものと規定している事からも見られる。(……l'homme qui n'est produit que ponr l'infinité.) この線に沿う人間は結局帰結するところは、人間の悲惨を指摘する命題に到るのである。

しかし此処にパスカルとモンテーニュとは非常な相違がある事を看過する事は出来ない。即ちモンテーニュは端的に人間の弱さと醜さを鋭く指摘するのみである。その鋭さは神の存在を否定する無神論者の論拠の薄弱な事に迄及んでいる。しかし、それは基督教の信仰を弁護する為めにではない。と言うのは信者の論拠をも彼は鋭く批判したからである。Que sais-je?—— この言葉がモンテーニュの性格の重要な一面を物語るならば、人間そのものに対する態度もこの言葉に依つて知られるのではないかと思われる。これをパスカルの二重性の論理から考えてみるならば、モンテーニュは人間を端的に一面的に規定するのみであつて、かくも醜く悲惨な人間をかかるものとして規定したままであると言う事になる。若し人間がかくも悲惨なものであると言うならば、当然かかる人間を救済し善導することこそ人間の義務であるとパスカルは考えたのであ

るが、モンテーニュは只かかる人間を傍観するに過ぎないとパスカルは言うのである。パスカルに依れば結局モンテーニュが対象とした人間は「啓示を剝脱された人間」(l'homme destitué de toute révélation) に他ならないのである。

此処にモンテーニュもパスカルも人間の悲惨と言う一点に於て一致している或る面を知るのであるが、更にこれから述べる点で本質的な相違を見るのである。即ちパスカルの指摘する悲惨は同時にそれと反対なるものを所有する事、換言すれば人間の醜さと悲惨は彼の二重性の論理の一構成要因であると言う事である。結論としては一致する面を持ちながらも意図を異にしていた点に於て注目すべき問題があるように思われる。

この意図と心情の相違は次のパスカルの言葉に依つて知られるであろう。即ち、Car ils peuvent bien être différents et conduire néanmoins aux mêmes conclusions, chacun sachant que le vrai se conclut souvent du faux. (Entretien de Pascal avec M. (de Sacy.)

右に引用した文から知られる如く、パスカルは思惟方法自体に自意識を持つていと考えられる。かかる自意識の内容に属する二重性の論理は上述の如き事態を方法論的に展開して行くところに、パスカルの二重性の特色があるように思われる。

さて、人間の弱さと悲惨はモンテーニュに依つて指摘され、人間の偉大さはエピクテタスに依つて指摘されているのであるが、パスカルに於ては、かくの如く別々の人間に依つて別々の事が主張されている事に非難の矢が放たれるのである。

「サシとの対話」が、エピクテトスとモンテーニュを対象としている事が色々な問題を含んでいるようである。サシは相手の趣向に沿うて話題を選ぶのを習慣としていた事は「対話」の初めの部分に記されているが、その習慣に従つてパスカルに水を向けたことになつている。それに対してパスカルは自分が最も常に読んだ書物はエピクテートスとテンテーニュとであつた事を答えている。かかる理由で「対話」は上の両人を対象としているのである。此の構想に対して色々な説がある。ストロウスキーの如きは「対話」の構造が「仕組まれていて、芝居じみている」と言つてその価値を低く見ている。(d'une façon préparée et théâtrale. Les Pensées de Pascal. F.

Strowski P. 74.)

二つの問題が二人の人間に依つてばらばらに取扱われていると言うパスカルの考えは、それ自体一つの解釈であつて、事態自身に関してはまた別な見方や解釈が存在し得るわけである。悲惨と偉大が夫々二人の人間に依つて強調されていると言う事実の指摘は、その他の諸事実の中から特に此の事実を選択したものであつて、此の選択自体が既にパスカルの立場を物語つているように思われる。そしてその選択を主題にして批判するパスカルの心は、その内的前提として、悲惨と偉大は同一の人間性自体に内在するものであつて、同じ人間が此の二つを同時に考うべきであると言う命題を持つているのである。この選択を前提とするパスカルの批判方法は、パスカル自身の立場を告白するものであつて、そこに二重性の論理が滲透しているように思われる。

かかるパスカルの立場はモンテーニュの言説から転じてモンテーニュの生活態度と心情に及んでいる。例せばパスカルはモンテーニュを指して、彼は苦しみと死を避ける (ainsi il fuit la douleur et la mort.) と批評し、異教徒として行動し (mais il agit au contraire, de cette sorte en païen) 意表に出るような事は背くけれども、他の人々のように行動する。(Ainsi il n'a rien d'extravagant dans sa conduite ; il agit comme les autres.) と批評している。蓋しパスカルに於ては生活自体が関心事の一つとなつていた事が知られる。これはG・ペリエの「パスカルの生涯」を読んでも側面的に知られるであろう。

右の如きパスカルの立場に立脚してエピクテートスとモンテーニュの欠点を指摘したのであるが、私は更にその批判を「対話」の中から次の如く取り挙げたい。蓋しそれに依つてパスカルの思惟方法と思想内容が必然的に類推されるであろうから。

先ずエピクテートスの場合

人間の初めの偉大さの若干の痕跡に注目して、その後の人間の腐敗を知らなかかつた。(remarquant quelques traces de sa première grandeur et ignorant sa corruption.)

その結果が彼を傲慢の頂上に導いた。(cequi le mène au comble de la superbe)

モンテーニュ

現在の悲惨を感じて最初の状態の尊厳を知らなかつた。(éprouvant la misère présente et ignorant la première dignité……)

其の結果が彼を真実の善へ達することを絶望させ、極端な卑怯へと転落きせた。(ce qui le précipite dans le désespoir d'arriver à un véritab le bien, et de là dans une extrême lâcheté.)

右の解釈はパスカルが先の両人に対して行つた批判の結果であるが、かかる箇条を前に置いて自己の見解を披歴するのである。それに依つて一層パスカルの二重性の特色が理解されると思う。即ちパスカルは彼にとりて欠陥だと思われる前述の両人に対して次の如く言うのである。「真理を悉く知るためには、一緒に認識されなければならない是等二つの状態が別々に認識されたので、必然的に傲慢と怠惰との二つの悪徳の何れか一つに導かれるのである。」(Ainsi ces deux états qu'il fallait connaître ensemble pour voir tonte la vérité, étant connus séparément, conduisent necéssairement à l'un de ces deux vices, l'orgueil et la paresse)

此の言葉から完全な真理の認識は二つの状態が一緒に知られなければならない事が考えられるであろう。この事は「パンセー」MS. 142. Brunschvicg 567 で Les deux raisons contraires. Il faut commencer par là. と言つて居る事からも理解されるであろう。相反する二つの論拠から出発しなければならないとするパスカルの方法が、エピクテートスとモテーニュと言う二つの対象に対して適用されているのを見るのである。

五、二重性の帰結

以上のような二重性の論理とも言うべきものは単に思惟の方法としてパスカルに存在していたのではない。今迄の論述は凡そ非論理的にして非体系的であると専ら此の国で考えられているパスカルに対して、強いて私が論理主義的方法を勝手に強要するかの如き印象を与えるかも知れないが、かかる印象を持つ者はパスカルの作品の表面のみを知り、且つ若干の宗教上の逸話をのみ知っての判断に過ぎないと思うのである。私はパスカルの宗教思想に対して独断的な論理を強要するものでは決してなく、その内在的な立場に於て問題を究明しようと思うだけである。

さて、パスカルの duplicité と言う事は端的に彼の特異なる論理的な性格でのみあるのではい。パスカルの宗教思想の内容そのものに或る意味に於て実質相に内在するものなのである。此の点について以下少しく論じてみたい。その謂わば実質的なパスカルの形而上学は要するに福音書の性格にあると彼は言うのであるが、福音書をかかる方法で規定するところに、彼の宗教理論があるのではないかと思われる。即ちパスカルをして言わしむれば、福音の真理は全く聖なる方法で相反する対立を調和させ、真なるものを完全に結合するのである。(C'est elle qui accorde les contrariétés par un art tout divin et unissant tout ce qui est de vrai……) 此の文で elle は前文の la verité de l'Évangile を受けている。更にまたパスカルはかかる相反する対立が聖書に於ては美しく統一されているし結びついているけれども、人間に於てはあたかも両立し得ない存在であると考えた。従って人間的には統一調和し難い対立を反対対立として contrariété として明示するパスカルの背後には今述べた la vérité de l'Évangile 即ち福音の真理が存在する事が信じられていたのである。かかる福音書の真理を信仰の立場に於て前提とするが故に、人間に於ける反対対立を如実に静観する raison で感受出来たのであろう。

elle en fait une sagesse véritablement céleste où s'accordent ces opposés, qui étaient incompatibles dans ces doctrines humaines

右の所説に依つてパスカルの二重性はそれ自体では成立し難い事が知られるであろう。乃ち duplicité は福音書なくしてはパスカルに於ては成立し得ないのである。かかるアポリアは福音書に帰結する論拠を持つ事に依つて、同一主体である人間に内在するものと考えられた。悲惨なる人間と偉大なる人間が存在すると言うのではなく、人間そのものが悲惨であると同時に偉大なのである。それは福音書的信仰を場とする限りに於て成立する命題である。

Nulle autre Religion que la Chrétienne n'a connu que l'homme est la plus excellente créature, et en même temps la plus misérable (Pensées. P.R. II.)

此の断章に依り二重性はキリスト教のみに於て成立することがパスカルに於て主張されて居る事が知られる。

かくの如く人間と言う同一主体に内在する対立であると見るところに、パスカルの宗教思想の特色があると考えられる。即ち二重性の存在する場は人間自体に他ならないのである。この場の中に多くの矛盾や対立が存在するのであつて、そこにパスカルは人間と言うものを考えていた。

Ces deux états étant ouverts, il est impossible que vous ne les reconnaissiez pas, Suivez vos mouvements, observez-vous vous-même, et voyez si vous n'y trouverez pas les caractères vivants de ces deux natures. Tant de contradictions se trouveraient-elles dans un sujet simple (Pensées, MS, 322. Brunschvicg 430)

右の断章の語るところはパスカルの謂わば人間観と言うべきものの一端が現われているように思われる。同一主体 (un su-

jet simple）の中に矛盾対立を見ようとする観点を私の問題とするのであるが、更に私はかかる内的矛盾を人間自身の立場から止揚すると言うのでなく。それに先行するキリスト教的信仰を前提としなければならなかた事が究明される必要があると思う。

そこで次に考察したい事は、悲惨とか偉大とか、理性とか心情とか言う対立（Contrariété）の生ずる原因の問題である。悲惨と偉大の原因は相互に因となり果となつている事をパスカルは明瞭に言つている。（La misère se concluant de la grandeur et la grandeur de la misère Pensées. MS. 161. Brunschvicg 416.）しかし乍ら端的に此の言葉に接するものは、一種の逆説とのみ感受するであろうが、或いは之れを弁証法であると言う者があるかも知れないが、そう思えばそう思われるであろう。しかし、パスカル自身の内的な心情は、かかるものを所有していたかどうか、パスカルを内在的主体的に考えてみるならば、かかる解釈は初学者を一応惹きつける程度の超越的解釈であると考えられる。

パスカルは更に別な角度から悲惨と偉大の根源を語つている。即ち、悲惨とか弱さと言うものは「自然」に帰せられ、偉大とか力あるものは恩籠に帰せられるとするのである。即ち彼は言つている。tout ce qu'il y a d'infirme appartenant à la nature, tout ce qu'il y a de puissant appartenant à la grâce（Entretien.）此の点からすれば、自然の産物として人間を見れば、人間は悲惨で弱いものになる。然るに恩籠に属するものと考えるならば、人間は偉大で力強いものとなる。此の意味を人間そのものを基準に考えてみるならば、人間は二つの世界に所属する可能性が考えられるであろう。人間がその何れに属するようになるか、そこにモラルが存在すると言うのがパスカルの立場であろう。自然にのみ所属することは、神を所有することにならないから、其処に人間の悲惨と言うものが発生する。之れをパスカルは Misère de l'homme sans Dieu と言う言葉で表現している。而して恩籠に所属する人間は神と共に存在するから、幸福であると言う事になる。パスカルはこれを Félicité de l'homme avec Dieu と表現をしている。この悲惨と幸福は相対するものとして、「パンセ

ー」MS. 25 では次の如く表示している。

Première partie: Misère de l'homme sans Dieu

Seconde partie: Félicité de l'homme avec Dieu

Autrement:

Première partie: Que la nature est corrompue. (Par la nature même.)

Seconde Partie: Qu'il y a un réparateur, (Par l'Écriture.)

右の表はボール、ロワイヤル版には存在しない。Brunschvicg では六〇になつて居り、Massis では第二章の冒頭に掲げられて居る。またLafuma では 1°Ordre の八になつている。かくの如く各版に依つて順序に異同があるが、Massis の「パンセー」が一番此の断章に重きを置いて居るように思われる。

悲惨と幸福の対立は人間が神を持つか否かに依つて決定されるように思われる。此の対立関係は人間が理性にのみ所属するか、或いは心情に所属するかにもある。悲惨と偉大のアポリアは所詮理性と心情即ち raison et coeur の対立となる。先に「真空論序説」に於て語られた二つの世界の対決は此処に再び raison と coeur の関係に於て登場するのである。若し人間が理性のみで生きるものならば、それは自然の法則に完全に属することになる。然る時人間は悲惨になる。何んとなれば、自然は考える葦を押し潰すには何等武装する必要はないからである。(il ne faut pas que l'univers entier s'arme pour l'écraser. Pensées. MS.13. Brunschvicg 347) 一吹の蒸気、一滴の水がそれを殺すに充分である。(une vapeur, une goutte d'eau, suffit ponr le tuer. ibid) 此の角度から考えるならば、考える葦でも自然には勝つことは出来ない。しかし、葦は考える力を持つて居る事を如何に考えるべきかと言う課題がパスカルには定立されるのである。「考える葦」(un roseau pensant) は葦である限り自然の力には弱い。しかし、それは考える力がある故に偉大である。此の意味に於て偉大さを求

めるには、思考の尊厳を知るべきで、「よく思惟するように努めようではないか」(Travaillons donc à bien penser) と言うのである。そして其処にパスカルは人間のモラルの原理を樹立しようとした。(voilà le principe de la morale(ibid))

然しながら、此の考える働きに偉大さを求めると言う思想は、此の断章に於けるままを端的に肯定する事は出来ない。と言うのはパスカルに於ては思惟作用には二つの意味、謂わば一種の二重性があるからである。

En un mot l'homme connaît qu'il est misérable. Il est donc misérable, puisqu'il connaît: mais il est bien grand, puisqu'il connaît qu'il est misérable (Pensées. P.R.XXI)

右の断章に於て Connaître と言う動詞が用いられているが、悲惨であると知るが故に悲惨であり、悲惨であると知るが故に偉大であると言う事になつている。即ち同じ知ると言う事から相反する結論が出て居る。これは確かに矛盾の法則を冒すことになる。之れが両立することは一種の二律背反に近いとし言えよう。其処で Connaître と言う動詞が前の場合と後の場合と違う作用を持ち異つた意味を持つものと考えなければ両立は困難だと考えられる。其処で私は前者の認識は理性の行う認識であつて、後者のは心情の行う認識であると思うのである。此の言葉の中には同じ文字 Connaître を場として raison と coeur の二重性が存在していると考えられる。

心情は理性と同様に考える働を持つ。パスカルの言葉は概念規定とその準拠が非常に流動的であるから、一般論理学の基準からは規定することが困難である。かかる意味に於てパスカルは心情の論理を理性の論理と対決せしめている。彼に依れば、心情には理性が全く知らない論理があるのである (Le coeur a ses raisons que la raison ne connaît point. Pensées MS. 8. Brunschvicg. 277)

パスカルの二重性はかくの如く人間と言う同一主体に内在する対立を意味するものであつて、それを人間自体の哲学的思惟に依つて止揚しようとするものではない。然らば悲惨と偉大、理性と心情、神と人間——是等の対立が端的に対立ではな

く存在すべきならば、それは如何にして可能であるかと言う事が問題になるであろう。二重性を二重性として生かしている根源者を前提として二重性は成立するものであるとは既に論じた通りであるが、此処で更に明瞭に言えば、それはイエス、キリストである。

qui n'est qu'une image et qu'un effet de l'union ineffable de peux natures dans la seule personne d'un Homme-Dieu (Entretien)

此処に神・人の一位の存在に依つて二重性はパスカルに於ては独自の思惟方法と同時に宗教思想の内容となつている。未だ多く問題があるが紙面の都合上今回はこれで筆を置く。

マックス、ミューラーの宗教学説

——その性格をめぐつての一考察——

戸田義雄

（一）問題の視点
（二）比較神學と宗教哲學
（三）比較方法としての言語學的方法
（四）「無限なるものの認識」と「無限優位感」

（一）問題の視点

マックス、ミューラーを以て、宗教学の始祖とするに、異義を挾む者は一人とてあるまい。

彼の「宗教学入門」(Introduction to the Science of Religion) が、ロンドンの Royal Institute に於ける、Gifford Lecture として企てられる以前、ルードヴキッヒ・ノーアックの「思弁的宗教学」(Ludwig Noack: Die speculative Religionswissenschaft. 1847) があり、エミール・ビュルヌッフの「諸宗教の学」(Émile Burnouf: La Science des Religions. 1879) があつた。

しかし、厳正なる科学的方法を以て、宗教研究にたち向つた者は、マックス・ミューラーを以て嚆矢とする。(1) 彼を以て、斯学の創唱者とする所以はそこにある。

恩師石橋智信博士の生前に於ける講義によつても、或はまた、博士の歿後、大畠清博士によつて、増補編纂せられた、「宗教学概論」によつても、先生の所謂、宗教主体の側よりする宗教本質論の展開は、実に、マツクス・ミューラーの宗教学説を通路として、これの精細なる批判吟味の彼方に展開せられたものであることに気付かざるを得ない。

新に刊行せられた前述の「宗教学概論」の第三章「マツクス・ミューラーの生涯と宗教学説」は、昭和五年春秋社版、大思想エンサイクロペヂア第七巻所収の旧稿に増補せられた箇所である。

このうち「マックス・ミューラーの生涯」は、昭和十七年「宗教研究」姉崎博士古稀記念論文集に載せられたものであり、「マックス・ミュラーの学説」は、先生御退官後、病床に就かれる日までに執筆せられたものであると云はれる。

先生が畢生の心魂を傾尽せられた「メシア思想を中心としたるイスラエルの宗教化史」は、イスラエル民族の宗教に於て、メシアの観念が成熟に至るまでの該思想の変遷を研究せられたものである。之が研究に当つて、ランプレヒトの近代史学の方法や、ハイデッガーの実存哲学等が、先生の学問の中で、いかなる位置を占めていたかが、或は問はれねばならぬかもしれぬ、

しかし、それにも拘わらず、マックス・ミューラーが提唱したところの宗教学の科学的研究方法、即ち事実の闡明、歴史的研究方法、発達的探究、原文批評的研究等に、まともに、そして正しく準拠せられたものであつたことを見逃す事が出来ない。

かくみて来ると、石橋博士にとつて、マックス・ミューラーは克服せらるべき対象ではあつた。しかし、克服せらる可きものと云う性格に於て、マックス・ミューラーは、博士の広い学問の根抵に、強い基盤を形成するものであつたとすら私には思われてならない。

石橋博士程、長いその学的生涯を通じて、マックス・ミューラーその人に対決せられた御方はなかつたとすら思われる。

斯様な、石橋博士にして、はじめて、精細なるマックス・ミューラーの宗教学説の研究もあり得た訳である。従つて、私如き浅学が、敢て、ここに蛇足を加えて、光被ある博士の御研究を穢すような事があつてはならぬと考えて居る。

このように自らに云い聞かせている私が、マックス・ミューラーの宗教学説に拙い検討を加えようとするには、いささか理由なしとしない。

マックス、ミューラーが、宗教学の名を用いて、斯学の建設を図つた一八七〇年以来、八十年余の歳月が流れた。その間、宗教心理学、完教社会学、宗教民族学、神話学、完教民俗学等、完教学の特殊研究領域は、確かに顕著な発展の跡をみせて居る。

しかし乍ら、これら宗教学の研究領域を、打つて一丸とした宗教学の学問体系の樹立と云う面に就ては、今日尚、学の若さをかこたねばならない。かかる反省の上に、宗教学の新たなる学問体系の構想と、その学を、学たらしめる基本的な研究方法の見透しとを、提示されたのは岸本英夫博士である。(2)

即ち、文化現象を、実証的方法を基礎として研究するものを社会科学なりと規定した場合、文化現象中の宗教現象を対象として、之に実証的、組織的研究を試みるものは宗教学であるが故に、宗教学は先ず以て社会科学として性格付けられねばならぬ、とされたのであつた。

ここに、宗教学の新たなる展開をみることが出来る。

社会科学として、宗教学を規定してかかる立場は、宗教学史的回顧を、自づから不可欠として居る。

宗教学創設以来の学統に、何を附加し、何を除去しようとするのであるか。新たなる学の展開は、このような問に対する解答を、学問史の反省としてなすことであろう。

かくて、先ず第一に、宗教学の始祖、マックス、ミューラーの宗教学の科学性と、その限界が問題とせられなければなら

ないのである。

（二）比較神学と宗教哲学

出版年代別に配列せられたる、マックス、ミューラーの著作文献は、その順序と内容が、そのまま彼の学的発展を物語る。そして、そこには、秩序ある系譜すら見出すことが出来る。

一八七〇年、「宗教学入門」を講説した Royal Institute は、彼が、之に先立つ数年前、近代言語学者としての全貌を顕露にした縁の地である。彼は「宗教学入門」を講ずるに当り、先に比較言語学を講じた際の、非難とその後の評価に対する思い出からはじめたのは故ある事と云はねばなるまい。その時の言語学講義が、Lectures on the Science of Language, 2 vols, 1861 となつたのである。この「言語学講義」が出版されてより、オックスフォード大学に於て、はじめて比較言語学 (Comparative Philology) は、正当の地歩を占める事が出来たと云う彼の回顧は、世界に於ける基幹的諸宗教の比較研究[3] (a comparative study of the principal religions of the world) と云う意味での宗教学の樹立に対する自信となつて居る。また、このような宗教の比較研究を不可能とする各種の主張に対する論駁を以て、宗教学講義を始めるに至る大勇断ともなつたとも考えられる。

今日、宗教学の各学派の分類に於て、比較宗教学派中の言語学派に、マックス、ミューラーが数えられる所以は、[4] 何よりも、彼が言語学者として登場したと云う、学的経歴が明にそれを告げることであろう。

幼稚なるもの、高等なるもの、偽なるもの、真なるもの、おしなべて宗教対象と云われるものは、すべて客観的に比較研究せられねばならぬと云う事、この事は我々にとつて、仕合せにも常識となつている。しかし乍ら、マックス、ミューラーの時代に於ては、今日の我々にとつて常識であるものが必ずしも常識ではなかつたのである。

アメリカ人にして、Gifford Lecture に招かれたる最初の人は、ウイリアム・ジェームスである。彼は、エンジバラ大学に於て、一九〇一年から二年にかけて、かの有名な「宗教経験の諸相」を講じた。この講義の始めに、彼は何を訴えねばならなかつたか。

従来の論理学に従えば、宗教的性質は何であるかに答えるものは存在判断（existential judgement or proposition）であり、それが、もつている人生や人間に対する意味が何であるかに答えるものは精神判断（spiritual judgement）である。しかるる、この二種の判断を、はっきり区別して用いることがうまく出来ぬため、純然たる存在上の見解について、いささか驚く宗教者が多い。あたかも、宗教経験は個人の生活史の上に起つた単なる珍しい事実であるかの如く、これらの現象を生物学的、心理学的にとり扱うと、このような崇高なるものを敢て貶し入れ、あまつさえ、人生の宗教的分野に不信の感をいただくものだとすら自分を疑うような人が居るかもしれぬと、ジェームスは聴衆に叫ばざるを得なかつた。[5] 存在判断とは、謂うまでもなく、あるがままの宗教事象の客観的科学的研究である。宗教学的研究である。

今を去る五〇年前、ジェームスはこのように前置きしなければならなかつた。まして、八〇年前にさかのぼる宗教学黎明期に於て、マックス、ミューラーが抗しなければならなかつた思潮は、いかなるものであつたか、想い半ばに過ぎるものがあろう。

「いかに極悪なる犯罪人に対しても、之まで歴史家や神学者が、世界の諸宗教を取扱つた程に、むごい取扱ひをした裁判官の例はあるまい。単なる人間としての姿を示すものでしかない。開祖の行為の節々を、しつこくつかまえて、何等の同情もなく論断するのである。キリスト教的方法と異るような、神まつりの礼拝儀式は何でも馬鹿にされ、軽蔑されるのである。かかる事は偶然になされた事ではなく、しかと腹を決めて意図されたことである。……このような必然的結果として、キリスト教が他の世界の諸宗教と区別される所の真のすがたを発見することが出来なくなつて了つた。……敢て他の諸

宗教をないがしろにすることよつて、開祖イエスが考えもしなかつたような位置に我々をおいて了つたのである。[6]」

キリスト教を唯一最勝とし、他を下等なる宗教とするような、価値感の支配する世界、それが正に宗教学誕生当時の精神的状況である。かかる状況下に、価値観をぬきにした、公平厳正なる諸宗教の比較研究が成り立たねばならぬことを、マックス、ミューラーは、何を拠り処として主張しようとしたのであろうか。

そこに優れた彼の比較言語学の素養が生かされる事となる。

「比較法によつて得られるものは何か。高等なる知識は、比較法によつて獲得され、且つ比較法にのみよると云う理由を、人々は問うことがあろう。若し、現代に於ける科学的研究の性格が、優れた比較法にあると云うことが云えるとすると、我々の研究は、得られる限りの最も広い範囲の証拠を基礎として、また人間精神によつて及ぼし得る最大限の広汎なる帰納法を基礎とするものであることを意味するに至る。[7]」比較法による真の知識の獲得はいかなるものであつたかを、比較言語学の成果を以て、示そうとした。

ヘブライ語は、二、三百年前まで、人類言語の根本であり、ギリシア語、ラテイン語等の諸言語は、何れもこのヘブライ語から派生したと考えられていた。しかし、この誤謬は、近代言語学の創始者達、即ち、ウイヘルム・フンボルトやボップ、ヤコブ、グリム達によつて覆へされた。その結果、失つたものは小く、得たものは逆に多い。科学的取扱ひの結果、ヘブライ語の性質が明になつたからとて、之迄通り、母国語に対する親愛の感はすこしも変らない。このような言語の場合にみられる比較研究方法は、之を宗教の場合にも及ぼしうるとするのが、彼の論拠である。

「ゲーテのパラドックス――一ケ国語しか知ざる者は、その国語をも知ざるものに等し（He who knows one language, knows none）――を比較言語学徒が用いた時、人々ははじめ大いに驚いたが、やがて、そのパラドックスの裡にかくされた真理がわかるようになつた。……同じことが宗教についても妥当する。一宗教しか知ざるものは、その宗教を真に知

るものに非ず（He who knows one, knows none）と。」[8]

故に、自己の信仰は、山をも動かす程強固なりと確信する人は多くいても、さて、あなたの宗教は何かと問はれると、黙りこくつて了つて返答することが出来ないではないか、という訳である。

宗教を比較研究する学は、厳密には二種の分野に分たれる。そのことをまた、彼は言語のもつ二種の意味と、その各々に対する研究の相違より推論するのである。

「言語の歴史的形態とは別に、言語能力なるものがある。同じように、宗教の歴史的形態とは別個に、人間には信仰能力（faculty of faith）がある。人間が動物と異る所以は宗教にあると云う場合、キリスト教とか、ユダヤ教とか云つた特定宗教を意味する訳ではなくて、ある精神能力を意味する。この能力は、感性や理性とは違い、否両者を拒否するものであつて、色んな呼び方をされ、色んな変装をしている或る無限なるものを理解せしめる力である。（faculty which, independent of, nay in spite of sense and reason, enables man to apprehend the Infinite under different names, and under varying disguises.）[9]

そこでマックス、ミューラーは、前者即ち宗教の歴史的形態をとり扱うものを比較神学（Comparative Theology）とし、後者即ち宗教を成り立たしめる条件の究明を理論神学（Theoretic Theology）とした。[10]

「宗教学入門」は、後述するように、専ら、比較神学のためになされ、理論神学は Natural Religion, 1889 に結実した。

「理論神学は、時として宗教哲学ともよばれる。私の判断する限りでは、この宗教哲学は比較神学の始めに位置すべきではなく、その終りに位置すべきものである。比較言語学の研究が、言語研究に、その位置転換を迫つたように比較神学の研究は、また同じような転換を、宗教哲学の研究にも生ぜしめた。このような確信を、かくしなく私は述べて来たのである。」[11]

右の告白によつて、マックス、ミューラーは、比較神学の上に、それを土台として宗教哲学が成立すべきものとした点、又、右にみたような、比較神学と宗教哲学の、車の両輪の如き関係を以て、彼の宗教学の全容は全きものとなることを知るのである。

同時に、我々は、宗教学史の上に長らく繰り返えされた宗教学と宗教哲学の聯関をめぐる循環論[12]の、遠き因由をここにまで求める事が出来るかと思う。

十九世紀に入る頃からの宗教哲学は、宗教史の影響によつて、屢々経験的な研究に近いものさえ含み、十九世紀末葉に至るまでは、往々宗教学と明確なる区分はみられなかつた。

十九世紀の中頃になると、法律、道徳、言語、神話など種々なる文化現象を、古今の諸民族について比較研究することが学界の一つの風潮となり、やがて宗教についても、記述的な宗教史から一歩をすすめた組織的研究としての比較宗教なるものが唱え出されて、そこにまた宗教哲学とは異る経験的な宗教研究が、独自の体系をもつてあらわれた。[13]

マックス、ミューラーが比較神学と呼ぶ処のもの、また往々、比較宗教史、比較宗教学などの名称で呼ばれるものがそれである。それは、宗教哲学とは異る、経験的組織的研究を意味し、単に諸宗教の教義や儀礼の異同を比較するだけでなく、それらを統一しての通宗教的なるものの性質、特にその発生発達の問題を中心として考察するものの如くである。

しかし、マックス、ミューラの宗教学体系は、比較神学と宗教哲学の両域を判然と区分するが如きで、実は之をよく果し得なかつたのである。むしろ両者の混融を以て、彼の学説の特色とすら云つてよいであろう。

比較神学の書としての「宗教学入門」は、宗教の比較研究を不可とする風潮に抗して、該現象の真の科学的取扱い（a truly scientific treatment of religion）の可能なる点を、比較言語学を依拠として論じ、かかる学の意義を高調するのに精一杯であつた。

彼の宗教学は、むしろ、「宗教学入門」の書かれた後、二十年近い歳月を経て、世に出た「Natural Religion」に於て体系を整えるのである。

宗教を宗教たらしめる性質、それなしでは宗教ではあり後ない特質、ヘーゲル流に云えば、宗教がそこに、どつかと腰を据える地床（Boden）にあたるもの、それを、「宗教の人心中に占める基礎いかん（what Religion is, what foundation it has in the soul of man）」[14]といふ問いの形で彼は求めた。それに答えるものが、理論神学の分野である。

人心に占める宗教の基礎は、或る無限なるものを認識せしめる信仰能力である。宗教は夫々、発達を異にしてはいるが、しかし、宗教を生ぜしめる種子は無限の認識である。[15]

彼は、宗教発生の種子である。この無限認識の発展を基礎理念として、宗教の起源、発生とその後の発展の諸様相を体系化せんとした。即ち、彼に於ては宗教哲学的研究の結果、得られた無限認識が、宗教の組織的体系的研究の根幹をなすのである。比較神学と宗教哲学との混融、そこに彼の学の学的曖昧さがみられるであろう。

従つて、彼の宗教学は、むしろ、今日言う処の一般宗教史の範疇に入るものではなかろうか。[16]石橋、宇野両博士をはじめとし、幾多先学の努力は広義の宗教学と、宗教哲学との間にどのような学問的境界線をひくかに傾けられた。更に、宗教学の目的は何かに。

石橋、宇野両博士は、夫々、独自の宗教本質論を展開された。だが、今や、社会科学としての立場からは、宗教本質の探求は、この学の目的ではなく、それは狭義の宗教学 Religiology の埒外におかれ、専ら、宗教哲学に委ねられることになつた。

そこで、宗教学が、その出発点として、最初にもつ処の操作概念、作業仮設としての宗教現象観[17]が擡頭して来たのである。

マックス、ミューラーは、「宗教学入門」に於て、無限なるもの The Intinite が、種々なる名をもつて呼ばれ、種々の相を呈するものであることに僅かばかりふれた。しかし、nnder different names, and under varying disguises にある無限なるものを、自然と、人間と、自我の中の三方間に要約して見出したのは、Natural Religion の第六講に於てである。やがて、之らは、各々、彼の宗教学各論ともみられるべき性質をもつた、

physical Religion, 1891

Anthropological Religion, 1892

Psychological Religion, 1894

となつて、世に出で、ここに彼の宗教学体系は完結を告げるのである。

(三) 比較方法としての言語学的方法

研究対象たる宗教資料は、むしろその多きに戸惑いせざるを得ぬ程である。豊富な、一見容易に処置し難くみえる宗教資料をいかに、操作したらよいのであろうか。

ここに於て彼は、「分類せよ、しからば勝たん (Divide et impera, and translate it somewhat freely by "classify and conquer")[18] の古語を引用して、或る準則に基いて分類すべきことを提示した。

彼は、彼独自の準則を述べるに先立ち、従来の、常識的な、或は学的と云われる幾多の宗教分類法に就て省察する所があつた。しかも何れも、彼の眼鏡に適ふものではなかつた。[19]

彼が、最も科学的なりとした分類法は、比較言語学の言語的方法によつて援用される事である。

蓋し、近代科学としての比較言語学の大きな功績は、人類の多様なる、その如くに多様なる世界の言語を、比較研究する

に当つて、科学的なる分類法を樹ち立てたことにあると考えられる。

この分類法の第一は Wilhelm von Humboldt (1767-1833) によつてはじめられ、August Schleicher や H. Steinthal 等によつて継がれ、言語界を長く支配するに至つた処の形態的分類法である。これは、人類言語の構造上、語法上、文法上の特徴を把え、この準則に従つて言語の分類を試みるものである。それは、言語の史的展開には関係なく、過去又は現在の或る一定時代に於ける言語の形態に着目するのである。

然るに、かかる形態的分類の起りは、「屈折の有無」を分類の標準とする着想から来たものであり、しかも言語学の創始者達は、「屈折語」を語る欧米人であつたために、屈折をしない言語を非文明的なるもの、未開なるものとみる傾きがあつた。[20] しかし、種々なる言語を詳細に検討すると、各言語間の差違は結局程度の問題と言うことになり、形態的分類法では、本質的分類を果すことが出来ぬと言う批判が生ずるに至つた。[21] 第二の系統的分類法はかくして登場したのである。

この方法は、或る一群の諸言語間の共通の源（之を祖語、共通原語、共通基語と種々に呼称する）[22] 即ち、言語学上、祖語と呼ばれるものからの歴史的発生の事実如何に基礎をおいて分類を試みるものである。

例えば、或る二種の言語を比較して、両者の間に、語彙や語法や意味や音韻などに関して、類似や一致が見出された場合、これを過去にさかのぼつて科学的研究を行つた結果、確かにこれら二種の言語は偶然の一致でなく、根拠のある歴史的一致だと言うことが実証されて来ると、この両者は同一の共通祖語から派生して来たものと言うように断定する方法なのである。

従つて、各言語、国語間に於ける共通祖語を発見する方法とも言える訳である。従つて、歴史的研究は欠く事の出来ないものとなつている。

故に、時として、言語の系統から、人類移住の跡を逆推し、或は一般文化の歴史的変遷の跡を逆推し得ることになる訳である。[23]

マックス。ミューラーもまた、系統的分類法に立脚した言語学者である。彼は、ヨーロッパ、アジアを貫く世界に、三つの大きな言語群即ち語族（Family of Language）を立て、その各々に主要なる言語、方言を所属せしめた。セム語族、アリアン語族、ツラン語族がそれである。

しかして、Lectures on the Sience of Language の第十四章において述べた。言語と思想は不即不離なりとする言語観を、宗教思想と言語の関係にまで拡大し、言語と、宗教の間には、自然的関係がある。[24] 従つて、言語の分類はまた世界の古代宗教の分類にも適用せられることを「宗教学入門」の第三講に於て主張したのである。

例えばアリアン語族中の各国言語が分派する以前に、共通祖語としてのアリアン語があつたと考えられる如く、アリアン人種が各国人種に分離する以前に、共通祖語にもあたる、祖宗教とも言うべき、アリアン共通の宗教（a common Aryan religion）があつたとするのである。同じように、セム族共通の宗教（a common Semitic religion）ツラン族共通の宗教（a common Turanian religion）があつたことを主張する。

即ち、古代に於て、言語に三つの中心、即ち三大語族が考えられた。それに対応（correspondence）して、世界の宗教に三つの中心が考えられるに至つたのである。

従つてこの事実は、世界の基幹的宗教（principal religions of the world）を科学的に取扱う場合の真の歴史的基礎となつている。[25] 彼が終始 principal religions と叫んだその principal には、起源的、要素的と言う意味を込めたものであることが伺はれる。

さて、しからば、この世界における宗教の三大中心のそのまた源は何か。それは既に科学の領域に於て答えることが出来ないのである。

何故ならば、比較言語学に於ても、語族間の親縁関係は発見出来ずに居るからである。この言語の状況に対応する宗教の

場合もまた然りである。言語学者としての彼は、敢てそのような冷厳なる事実を学の名に於て犯す事が出来なかつた。

そこに、他面宗教学者としての彼が、最後に、理論神学、即ち宗教哲学をもち込んだ所以ではなかつたか。無限なるものの認識がそれである。無限なるものの認識は、帰納的なる実証的研究の結果として導き出されたものではない。このことは彼の宗教学説の性格を規定する要点であると私は考えて居る。

何故、彼はこのような方法をとつたのであろうか。

それは、通宗教的なるもの、彼の言う宗教の種子を古代に求めて、それよりの派生として、形態的にも、時間的にも諸宗教の展開を体系化せんとしたからである。

進化論者としての彼が、宗教の系統的分類を推し進めたいやはてにおける、やむなき要求ではなかつたらうか。

日本語は、言語の系統的分類に於ては、その位置は不明であることを比較言語学は教えて居る。[26] 日本語の如き、系統の分明ならざるものには言語の比較文法は存在し得ないのである。

マックス、ミューラーに於て、日本の宗教が除外視されている理由は、ここにあるのではなかろうか。彼の宗教学は、必然的にこのような限界をもたざるを得なかつた。このことは、宗教比較方法としての言語学的方法の限界でもある。

（四）「無限なるものの認識」と「無限優位感」

彼は、宗教学を、その著「自然者宗教（Natural Religion）」にまとめあげた。しからば何故彼は「自然的宗教」と名付けたのであろうかが疑問となる。

Natural Religion の語が見える最初は「宗教学入門」の第二講に於てである。元来この語は天啓的宗教 Revealed Religion の対語であり、天啓的ならざる他の宗教会部を包括する概念である。しかし、マックス、ミューラーに言はせると、天

啓的宗教の特色は、創唱者の存在である。しかるに創唱者に天啓の現われる基盤はむしろ自然的宗教ではないか。天啓的宗教を木にたとえれば、自然的宗教は、その木の生ひたつ地盤である。

そこで、むしろ、自然的宗教は、天啓的ならざるものの意味ではなく、天啓的宗教の前にあるもの（Natural religion has, for instance, been explained as the religion before revelation）と規定すべきだと言ふ。

天啓的宗教の前にあるものは、やがて天啓的宗教をも含めた諸宗教の前にあるものとなつてゆく。

つまり、自然的宗教は、諸々の木にもたとへられる諸宗教の生ひ立つ地盤である。その地盤は「宗教の起源と発達」（Origin and Growth of Religion）の中で、種子と呼ばれるものと同一とみなされる。

諸宗教の地盤、種子が自然的宗教であると言ふことになる。その自然的宗教の実内容は「無限なるものの認識」である。「宗教学入門」では the Infinite と書かれて居り、之を理解する（apprehend）或は認知する（perceive）能力（Faculty）を宗教と見たようである。この能力は、感性（sense, Sinne）とも、悟性（reason, Verstand）とも異る。言へばドイツ語の理性（Vernunft）にあたる、第三の能力（the third faculty）であると説かれた。[27]

しかるに、「宗教の起源と発達」になると、the Infinite は the infinite となつて来る。つまり、はじめ、彼は、無限なるものを、実体的に把握していた感が強い。それが大文字で the Intinite と書いた理由であろう。やがて、それが、無限大と云つた感じの普遍的なるものを思惟するようになり、小文字で the infinite と書くに至つたと思われる。

さうして、「Natural Religion」では、the perception of the infinite と言うように、用語が統一されるに至るのであろう。

この「無限なるもの」は、石橋博士も指摘される如く、彼にあつては、対象的にとらへられていた。

前述の如く、マックス、ミューラーのこの概念は、、宗教の本質を説明するものである。

然るに、岸本博士が、提唱される「無限優位感」[28]は、その用語が極めて類似しているとは言へ、意味する処は全く異る。社会科学としての宗教学は、その研究の出発点に於て、宗教哲学を援用することを拒否する。

つまりあらゆる人文現象の中から、宗教と言われるものを選び出すための作業仮設としてのみ、「宗教とは何か」を規定するのであり、宗教学の究極の目的たる、宗教の本質論として「宗教とは何か」を導入するのでは断じてない。

従つて、岸本博士の無限優位感は、動的なる人間主体の側に生起した。遙に及びもつかぬと言ふ実感である。つまりこのような全心身的な体験に名付けられた心理的概念である。対象とのかかわりに於て言われた、無限なるもの認識とはこの点からも明確に区別されなければならない。

尚、当の岸本博士御自身から、この点を論述して戴くことが望ましく、私はただ、私なりに、問題のありかを指摘するに止める外はないのである。（未完）（一九五二、十、五）

（1）石橋智信「宗教学概論」十六—十七頁
（2）岸本英夫「宗教学の領域」（宗教研究一二一号）
（3）Introduction to the Science of Religion, London, 1873. Preface.
（4）宇野円空「宗教学」二三頁
（5）William James, The varieties of religious experience, a study in human nature,p.5—6.
（6）Introduction.p.221—222.
（7）Ibid. p.11—12.
（8）Ibid, 15.—16.
（9）Ibid. p.17.
（10）Ibid. p.21—22.
（11）Ibid. p.219.

(12) 赤松智城「宗教史方法論」参照
(13) 宇野円空「宗教学」九—十頁
(14) Introduction. p. 9.
(15) Origion and Growth of Religion. p. 51.
(16) 大畠清「宗教史學基礎論」(宗教研究一二一号)参照
(17) 岸本英夫「宗教現象とは何か」(宗教研究一二八号)
(18) Introduction p. 122—123.
(19) Introduction の第二講に於て true religion, false relgion. revealed religion, natunal relsgion. the primitive, the indolutrous, the reveales. national religion, individual religion. Polytheism. Monotheism と言つた各種の宗教分類法を批判した。
(20) 寺川喜四男「新訂、言語学入門」一九五頁
(21) メイエ、泉井久之助訳「史的言語学に於ける比較の方法」の附録「言語の分類について」によれば、メイエは形態的分類の無価値を論じ、効果的なる分類の仕方は、言語の歴史を基にした系統的分類のみであるとして居る。
(22) 泉井久之助氏は(21)の訳書の中で共通基語なる語を用い、高津春繁氏は「比較言語学」の中で共通基語、寺川喜四男氏は「言語学入門」で祖語を用いた。
(23) 寺川喜四男「新訂言語学入門」一九九—二〇〇頁
(24) Introduction. p. 215.
(25) Ibid. p. 516
(26) 高津春繁「比較言語学」参照
(27) Introduction. p. 18.
(28) 岸本英夫「宗教現象とは何か」(宗教研究第一二八号)

宗教的人格の研究

野村暢清

この研究は、宗教的人格の人格構造の在り方を明かにせんとする一連の研究の一部であり、TAT風の方法によつたものである。ここでは、宗教的な人々の一群と一般の人々の一群とを、同じ条件で比較し、その差を通して、統計的な行き方で、宗教的な人々の人格構造の特色を出さんとしている。

先ず本研究の方法の基底となつているTATに就いて言及し、次に本研究の具体的方法と結果の一部を述べる。

一

人格の在り方を心理学的にとらえる方法としては数多くのものがあり、G. Allport がその著 Personality (1937) に挙げたものだけでも51を算える。これらを S.Rosengweig は Subjective method, Objective method, Projective method の三つに大別している。

Subjective method とは、研究の対象となる人の内観内省を通す研究方法である。その中には、日記手記自敍伝など研究者によつて control されないものによる研究と、質問法の如く研究者によつて control されるものによる研究とを含んでいる。

Objective method とは事実の観察或は評定などによる方法である。特定の場面、特定の時間に於ける行動様式を観察記録する minuature Situation の如きがその最も重要なものである。

Projective method とは、その Project したものを通して人格をとらえる方法である。人格は意識的に自己を現はそうとする時よりも、むしろ無意識の中に、その人格の行動の中に、よりありのままにその姿を現はすものであると言うことがこの方法の拠つて立つ処である。

彼はこの三者相たすけて人格構造は明かにされるとしているが、この第三の Projective method により強い重要性を認めている。

この Projective method と言われるものの中には、Thematic apperception Test, Rorschach Test, Drawing and Painting, Graphology 等数多くのものが存在する。

しかし、これらの中最も標準化に近ずいているものは第一に Rorschach Test であり、第二に Thematic Apperception Test である。Rorschach Test は刺戟図形として無意味図形を使用するものであるが、Thematic Apperception Test はこれと異り、本テストに使用された如き有意味図形を使用する。それを中心にして物語りを作らせ、被験者の態度、反応時間、物語りの内容等を通して人格構造を明かにせんとするものである。

Rorschach Test は最も標準化に近ずきつつあるものであるが、人格構造の中に於ける複雑な思考行動の在り方、Symbol Organization の在り方の如きをとらえることは困難である。この部面はＴＡＴ風の研究の主として内容分析に於いて始めてなし得る処である。かくて、人格構造の中に於ける、Symbol Organization の在り方及びその機能の問題が、最も重要な問題の一つである宗教的人格の研究に於いて、ＴＡＴ風の研究が用いられねばならぬこととなるのである。

この Thematic Apperception Test は一九三五年 Morgan, C.D. and Murray, H.A の A method for investigating

phantasies, The Thematic Apperception Test. と言う論文に始めて紹介されたものであり、本来臨床的方法として起り来つたものである。爾来、H.A. murray, D. Rpaport, R. Harrison, T.B. Rotter, J.H. Masserman, E.R. Balken, R.N. Sanford を始めとして数多くの学者により多くの研究がなされ、その標準化への歩みも次第に進んで来ており、統計的方向にも次第に使用され来つている。

それは、最も普通には、面接により、多義的曖昧な有意味図形二十枚を示し、それを中心にして、どうしたのか、どうなるのか、どう感じているのか、どう考えているのか等物語りを作らせ、提示より話し始めるまでの時間、提示より話し終るまでの時間、反応時の態度、声の調子、反応内容等を記録し、それを分析するものである。

結果の分析は、学者により、それぞれ異つてはいるが、物語り中の hero の態度動機感情及び行動の慣習は、被験者の態度動機感情及び行動の慣習であるとする点、又絵中の hero に加えられる外的な力は被験者自身に利害を与えている力であるとする点の如きに関しては大体一致している。

以上の如きが、大体普通のＴＡＴの行き方であるが、刺戟図形を十枚とするもの、十三枚とするもの、話さずに書かせるもの等その modification には種々のものがある。本研究の如きもその極端なる変形と考えられる。

二

次に、本研究の具体的方法に言及する。回答用紙、その distribution、蒐集、分析に順次言及する。

回答用紙は、各四枚乃至三枚一綴りの回答票九部よりなり、各一綴りの第一枚目の裏面に写真が貼付してあり、それを30秒間眺める事を要求してある。第二枚目にその写真に対する印象を記入する様求め、第三枚目にこの人物の心中はどんなかを想像のままに自由に記入してもらい、第四枚目に、普通のＴＡＴ風に写真の場面を中心にして、どうしたのか、どうして

いるのか、どうなるのかと言う条件ずきでお話しを作つてもらつている。この様なもの九部がⅠⅡⅢⅣの順序に二重封筒の内側の封筒の中に入つている。

この九枚の写真は、その中の四枚が H.A.Murray の原版であるが、それらへの反応を通して、人格構造の在り方を比較的体系的に測定し得、又特に宗教的人格と一般人との違いを、又神道キリスト教等諸宗教的人格群間の差を検出し得る様撰定されている。写真Ⅰ写真Ⅲを通して Sexual tension を、写真Ⅲ写真Ⅴを通して対人関係に於ける在り方を、写真Ⅰ写真Ⅶを通して対自然の在り方を、写真Ⅰ写真Ⅲを通して activity の強さを、写真Ⅱ写真Ⅳを通して死の場面に於ける在り方を、写真ⅠⅡⅢⅣⅨを通して frustration に対する adjustment をと言う様に可能なる限り体系的に人格構造をとらえんとしている。

記入に際しては記入順序のみを規定し、記入時間、記入場所等に関する条件ずけはこれをなさなかつた。これは宗教的人格と一般人との人格構造の差は、かかる時間的条件、場所的条件を超えて、顕著に強く現れると考えた故である。

これを、家庭の状況生活信仰等をとう調査用紙、記入注意書、記入依頼状と同封郵送依頼したのである。

この調査の対象となる人々は、中間的な人々、特色の弱い人々はこれを排除し、典型的な人々を選んだ。典型的な宗教者と一般人を、典型的な神道者、プロテスタント者、カトリック者と一般人を比較研究せんとしたのである。

技術的便義の問題もあり、この典型的な神道者カトリック者をそれぞれの宗教に最も単的な意味で全生涯をかけている人々神官牧師神父の中から撰択した。宗教学的常識にもとずき、諸宗派の宗教学的教養ある人々とも相談して、典型的な神道者としての神官、典型的なプロテスタント者としての牧師、典型的なカトリック者としての神父を決定したのである。

かくて、プロテスタント者牧師一五〇名、カトリック者神父四五名、神道者神官六六名、一般人（教育者会社員経営者等宗教に無関心無関係な人を含む）六〇名、それぞれ三五歳以上の男子にテストを郵送でお願いし、牧師三三名、神官一三名、

一般人一九名、神父四名、一名につき二五枚ずつの Data を蒐集することが出来た。

本研究が普通のTATの如く interview method によらなかつたのは、研究対象の全国への散在、被験者意識を少くすること、回答の為長時間を要すること、統計的行き方の為比較的多くの量を必要としたことの故である。

最後に本研究の分析に関して一言する。masserman, Balken, Rapaport, Harrison 等の数多くの分析表があるが、本分析では各集団群毎に顕著に現れた反応差に特に注目して行く。実際の分析に当つては回答の形式的面よりする形式分析と回答内容よりする内容分析とに大別して形式分析より内容分析に進むと言う行き方をとつた。

三

研究結果に就いて述べる。

九枚の写真それぞれへの反応分析から出された部分結果を綜合して、本研究の最終結果としての全体的な綜合的人格像が構成されるが、その敍述は、紙数及び九枚の写真を入れねばならぬ等の関係上困難なので、この報告では形式分析による一二の部分結果と写真Iの内容分析による部分結果の一部のみを敍述することとする。

形式分析も Masserman and Balken の形式分析表に見られる如く種々の方向から分析がなされ得るが、ここでは一二の部分結果のみを紹介する。各人格群の回答の量の問題と、回答を通して観察される回答者の心中に現れ来つた概念の分類の二つに言及する。

各人格群G（一般人群）P（プロテスタント者群）S（神道者群）に就き Sampling により各十名ずつを撰定し、思考記述の総量を字数によつて測定すると、G一〇名の総字数は二三三九八字であり、Pのそれは五三一四七字、Sのそれは二六八一〇字である。SはGより少し多く、PはSの二倍にあたる量を思考し記述している。

この結果は記述の内容、内容構成の複雜さ、思考行動の進み方等の他の部分結果と照合する時、P（プロテスタント者牧師）の Fantasie の能力がG（一般人）に比較して大きなことをも示している様に考えられる。

次に、回答を通して観察される回答者の心中に表れ来つた概念の分類に言及する。

表（1）

	Aa	Ab	Ba	Bb	Ca_1	Ca_2	Cb_1	Cb_2	X	Y	Z	Total
G 一般人	1.74		1.62	2.23	0.06	1.79	0.39	1.06	0.06	0.75		11.62
P プロテスタント者牧師	1.24		1.22	2.46	0.09	2.55	0.45	0.95	0.05	0.50	0.12	11.09
S 神道者官神	1.89		1.77	2.08	0.13	2.21	0.35	1.06	0.10	6.81		11.85
K カトリック者父神	1.71		1.62	2.74	0.08	2.24	1.03	1.03	0.07	0.43	0.43	12.10
									0.11	0.74		
									0.02	0.80		
									0.02	0.53	0.36	

表（2）

		例
Aa	客体。主体以外のものの敍述	部屋 帽子。ベット。本机
Ab	主体。	
Ba	客体 Aa の在り方	美しい。薄暗い。ずり落ちんとしている。
Bb	主体の状態	貧乏である。孤独である。食うものがない。
Ca_1	過去の思考行動	考えた。苦悩した。
Ca_2	現在の思考行動	世の中は暗いものと考える。夢を失つている。怒つている
Cb_1	過去の思考行動以外の行動	泳いだ。走つて来た。
Cb_2	現在の考行動以外の行動	うつむいている。休んでいる。
X	特に emotional Tone 強い句	なんて可愛想なんだろう
Y	回答者の写真批判印象の表出	
Z	一応写真を離れた思考内容の投射。写真に直接関係のないことがらの敍述。普通の人々と異つた幻想的な内容	
Total	XYZ を除いた全数	

右の表(1)は、GPSKがそれぞれ全回答者の平均として一つの写真に対して、表(2)の分類規準にもとずいて、どの様な概念をどれだけ数思考し記述したかと言うことを比較した表である。

この表(1)を通して数多くのことを言い得るのであるが、ここでは各人格群の把握思考の主体性客体性の問題と、思考行動と他の行動の頻度の問題についてのみ言及する。

先ず把握の主体性客体性に就いて述べる。

表(1)の Aa Ba の数の多さは、従来の Projective method による研究の結果よりして、その把握思考の客体的な傾向の多さを示していると考えられる。これに対し、Zの多さは、主体的な把握傾向又思考傾向の強さを示していると考えられる。したがつて、各人格群に於ける Aa+Ba とZとの在り方の関係は、主体的或は客体的な把握様式又思考様式の強度をとらえる一つの規準となりうると考えられる。

その比較を取り出したのが上の表である。GとPとを比較すると、Aa+Ba に於いてP（プロテスタント者牧師）はG（一般人）より少く、Zに関しては三倍半程の多さを示している。この事はSに就いても同じである。SよりはPの方がはるかにZ的傾向が強いと言い得る。

かくて他の諸部分結果と共に、PSK宗教的人格群は主体的な把握と思考をなす傾向が強いこと、又Pはこの傾向Sよりよりはるかに強いことが主張され得る。

次に、思考行動とその他の行動の頻度に就いて言及する。

$$G \quad \frac{Z}{Aa+Ba} = \frac{12}{1.74+1.62}$$

$$P \quad \frac{Z}{Aa+Ba} = \frac{43}{1.24+1.22}$$

$$S \quad \frac{Z}{Aa+Ba} = \frac{24}{1.89+1.77}$$

$$K \quad \frac{Z}{Aa+Ba} = \frac{36}{1.71+1.62}$$

Ｃａ と Ｃｂ との概念数の比較は、被験者に於ける思考行動とその他の行動の多さの比率を示していると考えられる。各人格群毎に、この両者の比較を取り出してみたのが左の表である。

$$G\ \frac{Ca_1 + Ca_2}{Cb_1 + Cb_2} = \frac{0.06 + 1.79}{0.39 + 1.06} = \frac{1.85}{1.45}$$

$$P\ \frac{Ca_1 + Ca_2}{Cb_1 + Cb_1} = \frac{0.09 + 2.55}{0.45 + 0.95} = \frac{2.64}{1.40}$$

$$S\ \frac{Ca_1 + Ca_2}{Cb_1 + Cb_2} = \frac{0.13 + 2.21}{0.35 + 1.06} = \frac{2.34}{1.41}$$

$$K\ \frac{Ca_1 + Ca_2}{Cb_1 + Cb_2} = \frac{0.08 + 2.24}{1.03 + 1.04} = \frac{2.82}{2.07}$$

GPを比較するならば、思考行動以外の行動はGの方が多いにもかかわらず、思考行動ははるかにPの方が多い。又Sもそうである。

この事は、内容分析等の他の部分結果と共に、PSは、これら写真の如き実際の場面に於いて、思考行動が一般人よりも多いことを示している。

以上により、簡単ではあるが、この報告に於ける。形式の面かの分析による宗教的人格の在り方の特殊性に関する部分結果の紹介を終る。

次に内容分析の結果に言及する。

ここでは、写真Iの内容分析の中、次の六つの視点よりの部分結果のみを簡単に紹介する。写真Iは左の如きものである。

A 如何なる場面としてとらえたか。

B Frustration と Adjustnent に就いて

C Sexual Tension に就いて

D 自然の問題に就いて

E Want に就いて

F Activity に就いて

A

GPSKそれぞれの人格群が、この写真の場面を如何なる場面としてとらえたかに関し、特に注意を惹く事実は、この場面を悩み絶望失望の場面としたものGではその二一%にすぎぬに対し、P七二%、S七五%、K三三%（三ケース中一ケース）であり、この場面を「休んでいる。ぼんやりしている。考えている」場面としたものはG五八%に対しP二二%、S二五%、K三三%であることである。

ここにも、宗教的人格群の一つの特殊の姿が示されている。即ち、宗教者はかくの如き写真を見た場合それを悩みの場面としてとらえる傾向が一般人よりはるかに強いのである。それは、或は、青年時代に悩み絶望したことが多かつた故かもしれない。しかし、概して、宗教的人格群が、一の如き一般人にとつてfrustrationを惹き起さない場面に於いて、心的な悩や絶望に落入つたことが、落入ることが多いことを示しているように思われる。

B

先ず、各人格群のfrustrationの内容及び原因に就いて言及する。

Gでは、思想問題、恋愛問題、空腹と疲労の如きがこの写真の人物のfrustrationの原因とされているが、（この報告では一覧表を省く）PではGと異り、「えたいの分らなぬものの前に立つていること。」「通り一辺の相場的な知識に満足出来ぬ事。」「絶海の孤島に独り坐すかの如き人生。」「生に執着もたぬ。人生は何故こんなに面白くないのだろう。」「自己解剖に彼の青年は泣く、友に背いたことに苦しまねばならなかつた。真の愛は世にないと思つた。」「内なる自分との戦い。二つの自我のたたかい。」「自分の生命を没頭することの出来る生の対象がない。」の如きがその原因とされており、Sでは、「広大

な天地と孤独な自己の存在をひしひしと感じている。」「大自然に負けてしまつた。」「物心共に荒涼たる祖国の姿は彼に絶望的な暗さを与える。」の如き、Kでは、「死の土壇場でも、死に切れぬ自己の意志の弱さをなげく。」「意志の弱さにもとずく沢山の罪の意識におののく。」「虚無はますます心をむしばむ。」の如きが、この青年のfrustrationの原因とされている。

以上の結果の中に、それぞれの人格群のfrustrationの異なる姿が示されている。

Pのfrustrationの内容原因は一般人と明かに異つたものを含んでいる。一般人と明かに異つた人生の把握の仕方、ぎりぎりの人間そのものの在り方への志向、生きることの意味を見出さんとする努力の如きが現れている。これに対し、Sでは、大自然との対決の姿、国の意識がそのfrustrationの原因の中に強く入つて来ている。Kに於いては、自己嫌悪の傾向がここにも現れており、罪の意識等がそのfrustrationの原因として強く現れている。

次に、frustrationのadjustmentに言及する。

この写真の場面をfrustrationの場面としてとらえたものは、G五八%、P八四%、S八四%、K六七%であるが、このfrustrationの場面としての敍述は、PSK宗教的人格群に於いては、同時にそのfrustrationの場面へのinner adjustmentの敍述をともなつている。

即ち、Gでは、これをfrustrationの場面としてとらえたものの中、三〇%のみが、その場面へのadjustmentに、同時に、言及している。しかも、それはinner adjustmentではなく、すべてouter adjustmentである。これに対し、Pでは、frustrationの場面としてとらえたものの中六三%がそれへのadjustmentを同時に思考記述し、しかも、その中八九%はinner adjustmentであり、一一%のみがouter adjustmentである。Sでは、その七〇%がadjustmentを同時に思考記述し、その中Inner adjustmentは八六%、outer adjustmentは一四%である。Kでは、frustrationの場面としたもののすべてがそれへのadjustmentを思考記述し、しかもそのすべてはinner adjustmentである。

かくて、PSK宗教的人格群は frustration と同時に inner adustment を思考し敍述する傾向を強く有する人格であることが知られる。これは、宗教的人格が、frustration への inner adjustment mechanism を構へとしてもつていることを示していると考えられる。

更に、Pの四七%、Sの三三%、Kの六七%は、この写真への反応として、この人物の frustration-inner-adjustment のみを描くことを主題とした人々である。この事は、P Data No1, 2,3,4, 等いずれをとつてみても容易に理解され得る。かゝるものは、G（一般人）には一例も見出されない。

かく一般人と異つて、PSK宗教的人格群に、frustration-inner-adjustment のみを中心として取扱い又思考敍述するものの多いことは、PSK宗教的人格群の人格構造の中にて、frustration-inner adjustment mechanism が重要な位置を占めていることを示していると考えることが出来よう。（すべての他の写真の場面でも Inner adjustment を示している。）

次に、その Adjustment のなし方をより詳細に観察して行く。

Gの Adjustment は、「疲れ切つて海が渡れぬので困つている。（frustration）舟が見えた手を振る。かくて強い漁夫の腕に救われた。」の如き outer adjustment 三ケースのみである。

これに対しPの Adjustment は

「力強い声、漠然とではあるが、ほのぼのと明るいものを感じて立上り、希望もて平生の生活に赴く。」「いつもの様に思いに沈む彼の心内に一閃のひらめきを感じた。彼の心は暖められて、俺は立とう。孤独淋しさ苦しみもつ若者の友となろう。その者達と涙を流そう。かくて彼に新しい人生が始まるのであつた。」「自分ながらわからぬ程、内に希望と勇気の湧き出るのを覚えた。」「この様な青年には、薬物は殆んど効果がない。又外からの慰めや励ましの声も、ほとんど効果がない。ただ彼の心にふれる人の声ならざる声のみ彼に力を与え、また新に出発せしむる力となる。」の如き inner adjustment で

ある。P的人格はかくの場き adjustment をなす人格なのである。

これに対し、Sは、同じく inner adjustment を示してはいるが、その姿はPと相当異つている。

神道者の inner adjustment に於いて、隣人父母兄弟友と言うものは一つの働きをもつているらしく思われる。それは、「隣人や父母兄弟の暖かい追憶に更けるとき、神が甫めて彼の上に恵みを垂れるであろう。」「頭を挙げればよい。そして友を思い出すとよい。」の如き inner adjustment の process の中に現れている。しかしこの神道者の inner adjustment に於いて最も顕著なる特色は自然を通してのそれである。自然との接触を通しての adjustment である。

「今日も絶海の孤島にも似た巌上に座して、大自然の中に神の息吹を感じ『大いなるもの』の懐につつまれて、冥想にふけり続けた。」「大海に身を投げんとしたが、折しも雲間を洩れた月の光にえがき出された金波銀波の美しい海原を眺めた青年は『ああ美しいなあ、大自然は』そして大きいいなあ！　大自然に比べれば人間など大海の一粟に過ぎない。少さな人間が少さな考えで身を投げるなど如何にも恥しい。美しい自然を汚すことにもなる。生きよう生きようと、再び深い思に耽りながら、時の移るのも忘れたかのようであつた。……美しい月夜の海に見惚れた青年は、再び現世に生の執着を感じた。そして青白い月の光に包まれながら……青年は心身共に新しい温味に包まれて、その晩から神社神道の信仰に入り、次いで他の宗教をも研究中で、毎日感謝の生活を続けるようになつた。」「彼は今、自己の体温を感じながら、広大な天地と孤独な自己の存在をひしひしと感じている。同時に彼は無意識ながら何物かを求めている。それは大きな孤独感からの解放、現立感のない神我一体の境地であろう。」

神道者の inner adjustment の様式は、PKと異なり何か特に自然との関係を含んでいる。自然が adjustment の重要な契機として入り来つているのである。これはPK中に一ケースを見出されざる処である。聖書がキリスト教に於いてもつている位置、その同じ位置を自然が神道の中に於いて占めていると言つてよいと思われる場合も少くない。

C

GPSK諸人格群の Sexual Tension の強さを比較考察する。

G一般人中、写真の人物を男性としたものは七九%であり、女性としたものは一六%である。中性とした五%は海の精としたものである。これに対し、Pプロテスタント者に於いては、男性としたもの九一%、男性或は女性としたもの六%、（写真の人物が男性の場合、女性の場合と二つに欄を分けて記入したもの）女性としたもの三%である。S神道者に於いては、その九二%がこれを男性とし、八%が女性としている。Kでは三ケースで中一ケースがこれを女性としている。ここにも、PSに比較して、Gの Sexual Tension の度合が幾分か高いのではないかと言うことが考えられる。

更に、同じこのJの写真を提示され、それへの反応の中で両性間の問題に言及したものの数は、G一般人三三%、Pプロテスタント者二一%、S神道者三三%、Kカトリック者〇%である。

しかも、そのG一般人の思考記述の内容は、「恋愛をしている。いろいろの事情で結娘出来ぬので悩んでいる。」「官能的だ。この場所に遠くないところに相手の男性と滞在中、夕方つれだつて散歩に出て来た上で衝動に駆られて、彼との始めての抱擁を交したが、彼女の昂奮は最後まで鎮めてもらえなかつた。不満、疲労、悔恨、期待が外れたように落胆している。」の如きであるに対し、

Pに於ては、P二一%中、九%は「失恋の悩み」の場面としてこれをとらえており、六%がモデルとして、P Data No 30の如きは余り恋愛と関係ない場面としてとらえている。一ケース三%のみが「性の悩みを感じている」としているのである。

Kには、この写真への反応に於いて、両性間の問題に言及したものは一名も見当出されない。

ここにも、一般人と比較した場合、P（プロテスタント者）K（カトリック者）の Sexual Tension が低いことが現われ

ていると考えられる。

S神道者は、「この青年は娘と恋仲である。運転手と子爵令嬢。青年は解雇され、生木をさかれた思いで毎日苦しみ死を決す。」「日々女とたわむれてくらす不甲斐ないみじめさを払う為に、或日岩頭に来た。……『ああ』それは希望と慾情に苦しむ彼の溜息であつた。」

の如きを三三%含んでいる。

この結果より見るならば、S神道者は、PK等の宗教的人格群とことなり、Sexual Tension が低くない。一般人と大差ないことになる。先述の性別に関する結果、更に、写真ⅡⅢⅦⅨへの反応を考え合せる時、SはPKと異なりGよりは少し弱いが、Gと殆んど違わぬ Sexual Tension の高さをもつているらしいことが考えられる。即ち、神道はプロテスタント、カトリック等と異り Sexual Tension を引下げると言うような方向には働かない宗教であるらしく考えられるのである。

D

自然の問題に言及する。

G一般人では、その二一%が、この写真をみて自然との接触に言及しているに対し、Pでは、三二%名中ただ一名三%のみがこれにふれており、Kでは、何人もこれにふれていない。これらに対し、S神道者はその四二%その半数近くがこれにふれているのである。

次に、各人格群の自然との接触の在り方を、より詳細に観察して行く。

G一般人の自然との在り方は、

「自然の中にとけ込んで苦悩から逃れようとしている。都会を逃れて海に来た。絶望と苦悩とから逃れようとしたが救わ

れない。」「悩みから逃避して海への行楽に出る。果しない海、平和な海も、彼の悩みを慰してはくれなかつた。」「都会生活に疲れた人間、輝く太陽と海の色に生気を与えらる。しかしその幸福の中に孤独を感じ死にたい。」

の如く、先にSに関して述べた如き自然を通してのadjustmentはえがかれていない。ここに神道者の自然との接触と一般人のそれとの差が見られるように思われる。

G二一%、S四二%に対し、PKは極度の少なさを示している。Kは0ケースであり、Pは三二ケース中一ケース三%のみである。

しかもその一ケースとて

「広々とした大自然にとけ込むロマンチシズム。海から上り岩の上に座して、快よい情緒がわき、その中に一時したつた。彼はいつまでもこうしていたかつた。しかし彼は詩人ではない。帰り電車のこと、又あの都会の生活、勉強のこと、狭苦しい下宿と貧しい食物に帰ることを忘れない。」

に見られる如く、この人間の生活が中心になつてえがかれている。自然との接触に言及したものは、この一ケース以外にPKにはないのである。

ここに、SとPK、GとPKの差が顕著に現れている。

SとPKとの違いに就いて次のことを言い得る。

この写真Iをみた時、S神道者は自然の中にある人間をとらえる。自然をとらえ、その中にある人間をとらえると言つてよいかも知れない。しかし、これに対し、PKは先ずここにいるこの人間をとなえる。その背後の自然、島、海はあくまでも、その人間の背景としてとらえられる。或る場合には、この背後の自然は余り明瞭に意識もされない。ここにSとPKとの大きな差が存在する。S神道者は自然の中に、自然と人格との接触の中に生きている傾向が強いと言うことが出来るであろう。

キリスト者が如何に吾々も自然をと主張しても、このデータは明かにそれを否定するのである。

GはSの半数であり、その内容も異なりはするが自然との接触を相当度に示している。これによつてみると、日本人は一般に自然との接触度が強いと考えられる。この一般人がPとなりKとなつて行く時、(両者を比較しての重点の置き方が)自然よりも人間の中に、神道者となり行く時には、より自然の方向に動き行くと考えてもよかろう。

E

先ずそれぞれの人格群の Want の方向を観察する。

G一般人の Data 中、この写真の人物の Want が明かに見られるものは、その六三%である。その六三%を、Dominant Want の方向にしたがつて、「結婚したい。」「故郷に帰りたい」の如き自己の外に向つた Want と、「思想的な悩みを解決したい。」「人の声ならざる声を聞きたい。」の如き自己の内に向つた Want とに分つて見ると、外に向つたもの八三%内に向つたもの一七%と、その殆んどが外に向つた Want である。これに対し、Pプロテスタント者は、Want の方向が明かに見られるもの七五%で、その中 Dominant Want の方向が外に向つたもの三六%、内に向つたもの六四%と、Gと反対の傾向を示している。S神道者は、Want の方向が明かに見られるもの五六%、その中外に向つたもの内に向つたものそれぞれ五〇%と、GPの中間の形を示している。Kは Want の方向が明かに見られるもの六七%、その総てが内に向つたものである。

以上の如く、Dominant Want の方向に関しても、PKはGと相当異つた姿を示している。プロテスタント者カトリック者の Want それ自身が一般人と異なり内の方向に向つていることを、この結果は端的に示していると考えられる。更に神道者は五〇%、五〇%と、その中間の姿を示しているが、それには、神道の此岸性と言われて来たもの、現世利益的と言わ

れて来たものが関係しているのかも知れない。

次に、更に、Want の内容に就いて観察する。

これも、それぞれの人格群毎に相当度の相違を示している。

G一般人の Want の内容は「結婚の実現」「故郷に帰りたい。」の如きであるが、これに対し、Pプロテスタント者のそれは「内なる悩の解決」「人の声ならざる声きくこと」「人生の深い深い悩み、闇黒の中にもどこかにほんの僅かな一条の光を見出し度く希つている。」「自分の生命を打込んで没頭出来る生の対象を得たい。何か光と力にすがつて立上りたい。」「神の前に立つて恥ぢなきものとなりたい。」「自分自身を克服したい自分自身を微塵にくだきたい。」「完全な温い飛躍的な希望の未来観念に立ちたい。」の如くである。

Pに於いては、一般人と異なつた frusttration が、adjustment が、見出された如く、一般人と異なつた Want が中心になつている。勿論一般人と同じ様な「結婚したい」PData No11,16、「国に帰りたい」PData No 21 の如き Want も見出されはする。しかしその数は少い。それらは、この人格群全体としての Want の在り方を考える場合、その中心的位置を占めることは出来ない。これらはその Dominant Want の地位を前述の如き一般人と異なつた Want 群に譲らねばならない。

Need psychologist 又 G. Murphy 等の見解によれば、この Want の在り方こそ、personality の在り方決定の鍵であり、Personality 構造の中核的決定要素であると考えられている。G.Murphy は Want の System と Value の System とを同一視している。かくて、彼の見解にしたがえば、ここに表れた（GP人格群の）Dominaut Want の間の顕著なる差は Value System の顕著なる差を示している。更に、彼によれば、Personality は Central Value を中心とした一つのピラミッド形の構造をなしている。かくて、ここに表れている Want の間の顕著なる差は、両人格の構造の基本的差を

示していると考えられるのである。

この Murphy の人格構造に関する見解を、全く取るにせよ、取らざるにせよ、GP人格群に於ける Want の在り方は相当顕著に異つた在り方を示しておること、したがつて、それぞれの人格群の Want の体系、価値体系は相当異つていること、しかも、この Want の在り方の違いは、人格の在り方の、根本的な在り方の差を示していると言うことは認めてよいことであろうと考えられる。

S神道者の Want は「恋人と一緒になりたい。」「心の内を卒直に話し合つてみたい。」の如く、一般人群と同種のものを含みつつも、「祖国の明るくなる事を願う」「理性の生活に目覚めたい」「自分一個の仕合せばかりでなく、人類の福祉ねがう。」「無意識ながら何物かを求めている。それは大きな孤独感からの解放、対立感のない神我一体の境地」の如きに一般人と異なり、又プロテスタント者とも異なる Want の在り方を示している。

Kカトリック者の Want は「真理を探求したい。」「自分の生き方をはつきりさせたい。」「学問や哲学などでなく、本当のものをつかみたい。」「罪の意識におののいて罪を清算したい。」の如きであるが、そこにもGと異なる Want の姿が示されている。

以上の Want の在り方に、各人格群の人格構造の中核的構造の在り方が指示されていると考えられる。

F

各人格群の群としての activity の平均強度の測定はより適当な Situation であると考えられる写真Ⅲに於いてこれを行うこととし、ここではG一般人と異なるPSKそれぞれの activity の在り方に就いて一二言及する。

G一般人と、PSK各宗教的人格群との activity の在り方に関する最も顕著なる差は、PSKがその敍述の中に activity

の二段性をもつていることである。次に、このことを説明する。

G一般人には、「打勝つ希望を失い方針を失い確信を失つた。」「泳ぎつかれ、膝をかかえて、しばしまどろむ。」の如く、ある一段階の activity の強度のみが現れているに対し、Pプロテスタント者に於いては、「病弱、悲観、厭世、自然死か自殺、生きる意味もないようなこの世。」P Data No 6、「絶望に落入ることがある。」「空虚、自分の生命を打込んで出来る生の対象を得ていないから。」P Data No 14 の如き低い activity の在り方の表現に引つづき、「人の声ならざる声のみ彼に力を与え、また新たに出発させる。」P Data No 6、「むらむらと起る信仰の力で立上る。」「農奴として額に汗し、読書し、思索す。内に希望と勇気の湧出するをおぼえた。」Data No 14 の如き高い activity の在り方が現れている。

この activity の二段性、低 activity に続く高 activity、低き activity より高き activity への変化、これはGに一ケースも見られないに対し、Pでは三一ケース中一一ケース三四%に現われている。

ここに、宗教的人格の activity の一特色が見られる。このことは、SKに於いても、幾分かの内容の差こそあれ見出される。

Sに於いても、「大海に身を投げんとした」の低 activity に、「生きよう生よう」「身心共に新しい温味に包まれて……毎日感謝の生活を送るようになる」の高 activity の表現が続いている。これらはP程はつきりした形をとつてはいないが、一二ケース中四ケース二五%に現れている。しかし、このSの高 activity は「疲労で最早や立上る気力もない、併し……隣人や父母兄弟の暖い追憶にふける時神が甫めて彼に恵を垂れるであろう。」「今や自殺を考えている……絶望的な暗さ……神の息吹き感じ大いなるものの懐につつまれて冥想にふける。」に見られる如く、P程強いものではない。

Kカトリック者に於いても、「失望の極、再起の決意にもえるのだつた。」「自殺せんとす……生き抜こうと決意。」の如きにPと同程度の強さの高 activity を含む二段性が表れている。この二段性はK二ケース中二ケースに現れている。

この Data に現れた二段性の存在は、宗教的人格の人格構造の中に於いて、かくの如き activity の二段的変化の me-

chanism が frustration-adjustment mechanism と同じく重要な位置を占めている事、及び、その高 activity に関して、SはPKより弱いことを示していると考えられる。

更に、その activity の向けられる方向も、価値体系の在り方に従つて各人格群毎にそれぞれ異つている。

「自分自身を粉微塵にくだきたい。……自己から脱却したい。」「真理を探求せんとしている……虚飾を象徴する美衣をすて、真理を象徴する別の着物を衣る。」の如きに、PKの一般人とは異つた方向が示されている。

以上本報告では、簡単に、本研究の方法としての Projective method、TATに言及し、その極端な変形としての本研究の具体的方法に就いて述べ、次いで、本研究を通して出された研究結果を、形式分析と内容分析とに分けて、それぞれその一部の部分結果を紹介した。これらの諸部分結果が綜合されて本研究の最終結果としての綜合的宗教的人格像が構成されるのである。ここに紹介した諸部分結果は他の写真への諸反応を通しても、それぞれ肯定されるもののみである。なお、宗教学研究叢書宗教的人格の研究は Subjective method によつたものであり、これらは本研究と共に、一連の宗教的人格研究の一部なのである。

最後に、ここでのKカトリック的人格の在り方は四例のみによつたものであり、(四例と雖も純粋型の場合それで不充分とは言えないが)PSに対し比較として挙げると言う程の意味で使用していることをお断りしておく。

昭和二十六年一月―十二月
※―単行本

著者	題名	発行所 掲載誌	総頁 掲載頁	発行年月日 号巻	型
アルバルト、マグウス	神との一致について	ソフィア書院		一月三一日	
戸塚文卿	祇教の支那初伝の時期並にその初期弘通に就いて	東方学	四六―五三	三月一号	
石田幹之助					
井之口章次	禁忌について	民間伝承	八―一一	二月一五の二	
色井秀譲	善導念仏三昧に就いての一考察	宗教研究	一―三	二月二三四号	
池田鮮	学生のYMCA聖書研究実態	開拓者	四〇―四五	三月四七の三	
石村貞吉	神仏習合思想とその展開に就いて	東京女子大学論集	五三―六五	三月一の二	
井上光貞	古代仏教思想研究の動向 ―古代国家の成立、動揺と仏教―	史学雑誌	五五―六三	一月六〇の一	
魚木忠一	基督教精神史の方法に就いて	文化史学	一―三三	一月二号	
※宇井伯寿	日本仏教史概説	岩波書店	二一一	一月一五日	B6
上田義文	中論における相関性の論理について ―第十章「火と燃料との考察」の研究―	哲学雑誌	五八―八〇	三月六六の七〇九	
※梅原隆章	親鸞伝の諸問題	顕真学苑	四二七	二―一	B6
岡田重精	羽黒山修験道	文化	五五―五七	一月一五の一	
大野義山	三性説余論 ―真諦の「転識論」と安慧の「三十論頌釈論」―	哲学年報	一六七―一九〇	三月一二号	
太田祖電	三信釈の論理	大谷学報	二四―四五	二月三〇の三	
小笠原宜秀	中国近代浄土教の一考察	龍谷史壇	七―一四	三月三四	
※鹿野久恒	傑僧石川舜台言行録	仏教文化協会	三〇〇	三―五	A5
管円吉	信仰と学問	基督教文化	四一―四八	二月五三号	
鏡島元隆	正法眼蔵渉典私観	駒沢大学学報	三―二〇	三月一号	
窪徳忠	初期全真教団の一性格	東方学	一〇六―一一七	三月一号	
倉光卯平	儒教の天命観私観	西南学院大学論集	四七―五五	三月二の二	
小池辰雄	予言者の終末観 ―人間革命への路―	基督教文化	二三―二三	二月五三	
光地英学	善導に於ける称と念との問題	駒沢大学学報	七三―九四	三月一号	
近藤定次	神学の中心課題 ―北森氏のバルト批判について―	西南学院大学論集	一―二六	三月二の二	
佐野一彦	神社の地位	民間伝承	五二	一月一五―一	

佐久間鼎	「わかる」と「さとる」—禅の心理学的考察—	大法論	二四—三三	三月 一八の三
坂本幸男	縁起観展開の契機	哲学雑誌	二五—三八	三月 六六の七九
里内徹之	日本浄土教成立史における念仏集団について	龍谷史壇	二五—四七	三月 三四
※ジョーンズ 金井為一郎	人間苦とキリスト	新教出版社	三	月
※宗教辞典編纂会	宗教辞典	堀書店	二—二八	
※エルシュワイツ 野村完	イエス—精神医学的考察	みすゞ書房	一	月
鈴木宗忠	世界教としての仏教	世界仏教	二—九	一月 六の一
鈴木大拙	宗教と平和との関係	仏教文化	一—四	三月 七の三
王村竹二	足利養持の禅宗信仰に就いて	禅学研究	二〇—四〇	三月 四二
多屋弘	大谷本廟留守職考(下)	大谷学報	五十—五	二月 三〇の三
※高柳伊三郎	福音書概論	新教出版社	四一六	
都田恒太郎	日本の伝道と聖書	開拓者	三三—二七	三月 四七の三
中村元	鈴木正三の宗教改革論(1)	大法論	四九—五六	一月 一八の二
〃	〃 (2)	〃	六—一三	二月 一八の二

B6

中村元	鈴木正三の宗教改革論(3)	大法輪	一六—三三	三月 一八の三
〃	インド教と世俗内的倫理	哲学雑誌	一〇八—一二五	三月 六六の七九
※西村見暁	清沢満之先生	法蔵館	三六二	三—一五
ノルデ、フレデリック池田鮮	国際的危機下に果すべき基督者的行動綱領	開拓者	二六—三四	二月 四七の二
羽田亨	大奏景教大聖興帰法讃及び大奏景教宜元至本経残巻について	東方学	一—一二	三月 一号
羽田智夫	実存主義とキリスト教—Karl Jaspers; Vernunft und Existenz を繞つて—	明治学院論集	三三—三六	二月 二一号
早島鏡正	福田思想の発達とその意義	宗教研究	三—四五	二月 一二四号
バルト、カルル 森岡誠一	東と西の間にある教会	新教出版社	一二一	二—一五
蛭沼寿雄	新約聖書成立の経緯—新約正典史上に於けるマルキオンの地位に就いて—	開拓者	六—一三	三月 四七の三
久松真一	宗教的方法の問題(序説)	禅学研究	一—五	三月 四二号
藤原凌雪	親鸞の歩んだ道(上)	大法輪	五六—六五	二月 一八の二
〃	〃 (下)	〃	六〇—六八	〃
※ベルト・P 丘野慶作	イエズス伝	中央出版社	四七四	一—二〇

A5

A5

松崎 功	古代北欧人の精神生活とキリスト教の受容	史観	一六三―一七三	二月 三四の五	
増永 霊鳳	印度に於ける唯識思想の展開	駒沢大学々報	三―四三	三月 一号	
※増谷 文雄	キリスト教に対する仏教の主張	大法輪閣	一五七	一―一〇	B6
※民族学研究会	民族学辞典	東京堂	七四〇	一―三一	B6
宮本 正尊	解脱と涅槃―特に近代世界学者の涅槃研究―	哲学雑誌	二―二四	三月 六六の七九	
森中 章光	新島譲の生涯	ニューエイジ	三六―四七	二月 三の二	
諸戸 素純	祖先崇拝の理論	文化	一―一三	一月 一五の一	
※文部省	宗教年報 昭和二五年版	文教協会	七七〇	三―二七	B6
山崎 教正	岩手県下における祕事法門	文化	三〇―三九	一月 一五の一	
山口 益	維摩経仏国品の原典的解釈（下）	大谷学報	四六―五六	一月 三〇の三	
〃	ヨーロッパに於ける最近一年間の仏教研究の業績―巴里大学教授 マルセル・ラルの報告―	哲学雑誌	二六―一四四	三月 六六の七九	
渡辺 楳雄	禅三宗系統の新興教団	道元	一〇―一一	二〇 一三の二	
赤岩 栄	キリスト教と共産主義	理想	三五―三五	五月 二一六	
〃	青年と宗教	青年心理	六六―七一	二―二	
青木 茂	庶民信仰に現われた治病思想	宗教研究	七六―九七	四月 八	
石田 瑞磨	我が国に於ける鑑真渡来以前の戒律	駒沢大学学芸部研究紀要	一―二〇	一二五	
今村 義孝	十六世紀後半に於ける日本耶蘇会布教活動の形態―1―	秋田大学学芸研究	四七―六七	一	
岩崎 真澄	絶対者の芸術的表現	大乗禅	一―一三	一	
伊藤 康安	既成教団論	〃	一六―二〇	五月 二八の五	
〃	五宗教法人法論	〃	一〇―二〇	二八―四	
※ウイリヤム・ランプル	基督教と社会秩序	新教出版社	一二九	五―一五	A5
後藤 真	仏教思想研究	永田文昌堂	四三二	四―一五	A5
※上田 義文	経典となつた立教神	金光教学	一―八	四 八月	
大淵 千仞	現実に於ける金光教祖の位置	〃	九八―一九	〃	
岡本 睦範	現代青年と宗教	ニューエイジ	一―八	六月 三の六	
管 円吉	真宗の発展と一向一揆	法蔵館	一	四―一五	B6
※笠原 一男	漁業神としての稲荷信仰	民間伝承	八―一三	五月 一五の五	
亀山 慶一	マルテイン・ルッター	弘文堂		六 一五六	
※北森 嘉蔵	清朝に於ける仏寺道観及び宗教生活に関する法律	仏教文化研究	一五五―一五	六月 一号	
M.de Groot 牧田 諦亮					

小林　信雄　神秘主義と終末思想 ―新約聖書神学の一集点― 宗教研究 一二五 三―四七

来馬　逐道　日本教分離史概観 宗教公論 三三―二七 六月 二二の五

工藤　英一　明治中期における土地問題とキリスト教 基督教文化 四七―五三 四五月 五

小松堅太郎　社会的存在と宗教形態 社会学評論 二八―一四八 一―四

金光　真整　教祖時代のまつり 金光教学 一五五―二〇 四月 八号

桜井徳太郎　信仰的講集団の成立 民間伝承 二一―七 五月 一五の五

佐々木英夫　宗教科教師のありかたに就いて 弘道 一三―一六 四月 六〇の六二

椎尾　弁匡　日本仏教の新使命（上） 世界仏教 八―一三 四月 六の四

重松　明文　中世浄土教の一性格 史学雑誌 三九―五四 四四

椎尾　弁匡　日本仏教の新使命（下） 世界仏教 一五―一九 五月 六の五

志矢　保久　信教の自由について ―壇家制度の批判― 〃 四四―四七 〃

※鈴木　木拙　禅思想史研究　第二 岩波 五―一五 A5

住谷　一彦　アジア的宗教意識の構造 ―マックス・ウェーバーによる一つの問題提起― 基督教文化 三六―四六 四月 五五

曾我　量深　直宗教について 世界仏教 三三―二七 六―四

竹田　智道　宗教法人法の基本的理念 仏教文化研究 五三―八四 六月 一六号

田村　円澄　法然伝の諸問題 世紀 四―一四 二五

近山　金次　大ローマの没落と教会 仏教文化研究 三―二四 六月 一六号

塚本　善隆　宝巻近代シナの宗教 仏教文化研究 一三三―一五四 六月 一六号

塚本　俊孝　北魏の仏教受容について 岩波 三七二 四―二五 A5

※辻　善之助　日本仏教史　中世篇の五 春秋社 一三三 六―三〇 A5

※デュウイ・T・岸本英夫　誰でもの信仰 声 七三―七六 八八二

富沢　孝彦　原始教会物語　一二 仏教文化研究 九三―一三 一六号

藤堂　恭俊　北魏における浄土教の受容とその形式 基督教文化 三〇―三九 四五月

成瀬　治　敬虔主義の歴史的意義 法蔵館 一八三 六―一 B6

※西谷　啓治　現代社会の諸問題と宗教 信仰 一九―二六 五月 六の五

原　随園　歴史精神と祖聖親鸞 文化研究 一―三三 六月 三号

奏　慎二　KOINONIA ―キリスト教倫理の根本構造― 法蔵館 一〇七 二〇五 B6

※久松　真一　人間の真実存 哲学年報 一―一三 一〇

干潟　龍祥　馬頭観音考

藤吉慈海　瑜伽行派に於ける浄土教の問題　仏教文化研究　二五—三六　六月号

※深浦正文・大原性実　理代人の宗教的疑問の解答　永田文昌堂　一一四　四—一〇　B6

古野清人　死霊観念の展開　完教研究　一二六　一—二〇

古江亮二　阿言王霊迹思想補考—一—　宗教文化　四三—四七　六

仏教連合会思想対策研究会　社会主義と共産主義と仏教　仏教思潮　二—一三　四月　四—三

〃　〃　〃　二—一四　四—四

松田金次　小豆島のキリシタン　基督教文化　六二—六五　八八二

森岡誠一　バルトの国家観—ドイツ教会闘争前における—　二〇—二七　五六

山階芳正　五島の旧支丹　民間伝承　三六—四一　四月　一五の四

香山　中国古代に於けるトと巫について　宗教文化　二七—四七　六

山本和　信仰告白の政治的射程　基督文化　九—一九　五月　五六

渡辺楳雄　新興宗教と女性教祖　宗教公論　九—一四　五月　二の四

※渡辺照宏　新訳句経講話　大法輪閣　五—一

赤岩栄　宗教と社会科学との対決　一〇—一四　九

※バルト、カルル・井上良雄　教義学要綱　新教出版社　三二〇　二六　九一　B6

藤谷俊雄　部落解放と宗教の役割　部落　二三—一八　二四

フルトン、アワスラー・飯島幡司　偉大なる生涯　南山大学出版部　五五五　二六、七、三〇

樋元和一　危機神学の生成とその展開　哲学研究　四七—三六　四〇三

金倉円照　仏教における生存の意義　大法輪　一五—三三　一八—七

長崎次郎　日本初期プロテスタント教会に於ける無教派的傾向　福音と時代　二四—二九　六—六

中村元　インド民族資本の精神構造への視点—ジヤイナ教の経済倫理　東洋文化　一—三六　六

那須実秋　チベットの宗教事情—現地報告—　世界仏教　四四—五九　六—八

野村耀昌　健陀羅仏教文化私考—二—　大崎学報　五三—六六　九八

小川貫式　居士仏教の倫理的性格　龍谷史壇　一—二〇　三五

小口偉一他　対馬の宗教　人文　八六—一〇一　一—一

〃　新宗教集団の形成とその基盤—シヤマニズムと祖先崇拝との複合形態—　思想　二九—三四　三二七

幼方直吉　中国におけるキリスト教の動向—三自運動を中心として—　基督教文化　五一—五四　五七

ブレイス　新約聖書に於ける歴史像　開拓者　三七—五二　四七—五

A5

佐木 秋夫	アジアの目ざめと仏教の可能性	大法輪	一〇—一八	一八—九	
〃	新興宗教の性格	世界仏教	三三—三八	六—九	
嶋田啓一郎	宗教的リアリズム—「福音的」と「社会的」—	開拓者	二—一〇	四七—五	
田北 耕也	キリシタン現地報告（一）プロローグ	声	三四—三七	八八五	
戸田 井助	ルターとキエルケゴール	基督教文化	三三—四四	五七	
和歌森太郎	天童信仰について	人文	一〇二—一二四	一—一	
渡辺 楳雄	新興教団の現勢について	世界仏教	一六—一九	六—九	
古田 紹欽	盤珪と洞門の人々	仏教史学	一五—一四	二六九	
※逸見 梅栄	随筆 仏像	多摩美術出版部	二〇九	二六八	B6
石田 充之	成覚房幸西大徳の浄土教的立場	真宗学	五一—七	二六七	
※石井 教道	選択集の研究 総論篇	平楽寺書店	三六四	二六九	A5
金倉 円照	仏教における生存の意義	大法輪	一五—三	二六七	
加藤 仏眼	超発六八の願心（承前）—四十八願の組織—	直宗学	一—三	二六七	
※孤峰 智璨	承陽大師伝	鴻盟社	一三一	二六九	B5
大江 淳誠	三願欲生	真宗学	九—八六	二六七	
※大江 賢昇	藕絲曼陀羅を廻りて	敬覚寺	三五	二六七	A5
大橋 俊雄	初期の番場時衆について	仏教史学	二五—四六	二六九	
竹田 聽州	仏教的同族神	〃	四七—五	〃	
田村 円澄	法然伝の史的考察（下）	仏教史学	五—六六	二六九	
瓜生津隆雄	安心決定鈔管見	真宗学	三三—五〇	二六七	
中国資料月報	中国宗教会の新動向—キリスト教の三自運動と仏教界の動き—	中国資料月報	一—三五	四六	
※ドレウス 原田 瓊生	キリスト神話	岩波	二九四	二六、三五	B6
深沢 留一	縁起物に現われた江戸市民の信仰生活	国文解釈と鑑賞	五—六三	二六、三五	
二葉 憲香	日本仏教史の始源に関する日本書紀の記述について	龍谷大学論集	六二—七四	三四一	
長谷川如是閑	宗教的行動及び心意	宗教研究	二七—四七	一二八	
※堀 一郎	民間信仰	岩波	二九七	二六、二五	B6
※石津 照璽	宗教哲学の問題と方向	弘文堂	一七六	二六、二五	B6
貝塚 茂樹	ウェーバーの儒教観	東洋文化	一—二六	七	
岸本 英夫	宗教現象とは何か	宗教研究	二—二六	一二八	

工藤　英一　島村における教会成立の事情―蚕種業との関連について―　明治学院論業　八一―九三　二四

桑田　秀延　基督教歴史観　神学　二―三六　三

Q・マックナイト　宗教社会学への一考察　基督教研究　三九―四五　二五―二

※花宮本正尊・山信勝・辻直四郎・中村元編　印度哲学と仏教の諸問題　岩波書店　五六六　三六、三　A5

森　龍吉　「救い」から「解放」へ―真宗教団と部落―　部落　六―二　二五、二六

森戸　辰男　キリスト教の社会的役割　ニューエイジ　一九―二七　三―一〇

向高　祐興　二十世紀の宗教哲学の課題　理想　九―九六　三五―九

中川　秀恭　バルト神学の形成　神学　五三―七八　三

※中村　元　ブラマ・スートラの哲学　岩波　四九四　三六、二　A5

宗教研究第一二七号　日本宗教学会　一六六　三六、一〇

※日本宗教学会編―第十回学術大会紀要―

奥野　高広　神祇公頌について　国学院雑誌　五六―六三　五三―一

折口　信夫　神道　宗教研究　一―一〇　一二八

坂本　幸男　仏陀観の発達　法華　三六―四四　三六―二

佐藤　日吉　宗教的生の構造　学芸　九一―九六　二―二

柴田　貞一　尾北切支丹の中心大山　郷土研究　二三―二六　六

重藤　威夫　マックス、ウェーバーの宗教社会学　経営と経済　七―八四　三―三

※新宗教論大系　宗教と哲学、科学　五月書房　二五二　三六、二、二五　B6

静谷　正雄　南天竺に於ける龍樹の遺蹟　龍谷大学論集　七五―九〇　三四一

小名子正義　カトリック教以前におけるフィリッピンの社会と宗教　天理大学学報　二三―五三　三―一

高橋　博志　懺悔の段階について　金光教学　一―一四　九

内田　守昌　思ひわけ―教祖的立場の一考察―　金光教学　三六―五〇　九

和歌森太郎　神送りの場所―地主神と客人社―　民間伝承　二―一〇　二五―一〇

渡辺　広　部落民と祭礼―部落民の源流―　ヒストリア　二―二五　二

渡辺　公平　改革派神学に於ける三位一体の原理　文化　四六―六三　一〇―一

※山口　益　世親の成業論　法蔵館　三一六　三六、三、一　A5

山野　正孝　セイロンの宗教事情―現地報告―　世界仏教　四八―五三　六―一〇

安津　素彦　神仏交渉の論―本地垂迹説を中心として―　芸林　三―四三　二―六

結城　令聞　大乗仏教の興起　世界仏教　八―一四　六―一〇